
古神道

ATS

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

古神道

【Nコード】

N6050D

【作者名】

ATS

【あらすじ】

閉ざされた学園の中で起きた事件。それを調査するために、一人の少女が学園に降り立った。それは事件なのか事故なのか。狂つてゆく人間関係の中に、事件の真相はあるのか。事件の影に潜む呪術の存在。陰陽師の乃亞は、最後までこの事件を追う事が出来るのか。現代学園ファンタジーの幕開けです。

其の一

往く者

街は都心から離れているものの、意外と利用客の多い駅を中心としてそこそこの賑わいを見せていた。とはいえ、大都市の様な不夜城の街という訳でもない。

賑わいを見せる地域は駅周辺の一部だけで、少しでもそこを外れれば、途端に喧噪とは無縁の静かな住宅地に出る。

そして、さらに車を走らせれば、10分も経たない内に山間の寂れた風景へと変化する、そんな多面性を持つ街であった。

しかしそれは街の一つの売りでもあった。

駅から15分という手軽さで雄大な自然の残る山々を満喫する事が出来ます
という宣伝文句の通り、手軽に山へと出られるからである。

山は街を北側からぐるりと取り囲む様にして連なっていて、春には新緑が目まぶしく、秋には紅葉が燃える様に鮮やかで、それを楽しみに散策に来る者も少なくない。

ただし、それらを楽しめるのは山の入り口付近だけで、山の麓まで来ると、実際に登ろうとする者は少なかった。

それは、山にどこか人を拒む気配があったからだだった。

確かに遠くから見れば山は綺麗であった。山間を、ゆったりとしたカーブを描きながら流れる清流も見る者の楽しみの一つである。しかし、山に近づけば解るはずである。いかにこの山々が険しいかが。

雄大な自然を湛える緑の山　　は、言い換えれば光すら通さぬ程の森深き地であり、整備されていない場所も多くて人を拒む黒き樹海のごときであつた。

不気味

とは違ふのだが、どこか容易に近づく事をためらう……そんな雰囲気を湛えているのだ。

そんな山々へ抜けるには、清流と平行して走る道を行く。

清流は街のもう一つの象徴となつていただけあつて、豊富な水量と透明度の高さは相当のものがあつた。

途中、何度か支流に分かれたり合流したりと、幾筋かの流れが絡まりあふのだが、それがまた自然の妙を醸し出していて美しい。

そんな清流は大きく分けて三本の流れから成り立っていて、それぞれに車が通れる道が平行して走っていた。

まずは一つ目の道。

この道は途中何度か道幅が狭くなつてすれ違いに苦労する場面があるのだが、都内の外れへ直接出られる利便さからか、まあまあの交通量がある道であつた。

二つ目は都内へ抜けるそれとは正反対に伸びていて、隣の市へと抜ける唯一の国道であつた。この道は他の二つとは違い、国道と言っただけあつて格段と交通量が多い。しかし、街と街をつなぐ重要な産業道路は交通事故も多く発生し、悩みの種となっているのも事実である。

そして三番目の道だが、これは前出の二つとは少々毛色が違っていた。

一応舗装もされ、バスなどの大型車同士では苦しいが、狭いながらも乗用車同士ならばすれ違う事も出きるきちんとした道であるのだが、その道を利用する者は極端に少なかった。

それもそのはずである。道は、前述の二本の様にどこか他の地域へと抜けられる訳ではなく、純粹に山の麓へと出るだけの道だからである。

その昔、街は林業が盛んな時代があつたのだが、その時はまだ木材などの搬出で大層な賑わいを見せていた。しかしそれも、林業の衰退と共に街そのものも寂れていった。

私立佐久間学園は、そんな道の終点から登る、山の中腹に位置していた。

学園のある山の高さはどれ程であろうか。一応学園の前までは舗装された道路が整備されていて、学園前にはバスの転回所も用意されているのだが、頂上を目指すならばそこからは徒歩になる。

山の麓から学園までは車で10分ほど。

そこから頂上まで歩く場合、健脚の者でも小一時間程度はかかると言つ。それ程の高さと言つ訳でも無いが、さりとて簡単に登れる様な山では無い　　と言つ山だった。

周囲の山などでは建材用の杉が植林されていたが、学園を中心とした三つの山では落葉樹が多く、それこそ紅葉の時期には観光登山者がカメラを片手に結構な賑わいを見せる。

ただし、大概の者が学園前のバス停まで来ると、さらに上を目指す様な事は無く、そのままバスに乗って帰っていった。

バスで10分と言う道のりではあるが、実際に歩くと、斜面のキツさに音を上げる者が殆どであるからだった。

そんな山であるから、佐久間学園の生徒は誰一人として徒歩で通う者はいない。もつとも、一部の地元生徒などを抜かして全寮制を取っている学園なので、通学の心配は無かった。

ただ、土日を利用して麓の街や実家に帰っていた者が、終バスに乗り遅れて仕方無く歩くケースはあった。

それこそ昔は、材木問屋やそこで働く者の為にバスの路線が多少なりともあったのだが、今では利用客の大半が学園の関係者で、山の麓のバス停止まりの便はいくつかあるモノの、学園前まで来る便は数本しか無い。

よってそれを逃した生徒などが徒歩で登る事になるのである。

これは地元の人間や、学園の関係者ならば誰でも知っている事であつたが、不意の来訪者に取っては全く知らされておらず、生徒同様に後悔する羽目になる。

佐久間学園は私立の有名学園と言う事もあって転校して来る者も多いのだが、それらは必ずと言って、学園までの道のりを徒歩で歩かされることになる。

そして今日も一人、そんな山道を徒歩で行く少女の姿があつた。

五月の始めだと言うのに日差しが強く、山道を行けば直ぐにでも汗が噴き出して来るほどの暖かい日、少女は額に汗一つ浮かべるでも無く、楚々とした表情のまま学園へと向かつて歩いていった。

年の頃はちょうど高校生くらいだろうか、吸い込まれそうな程の漆黒の瞳と、同じく艶のある長い黒髪が、知的な雰囲気醸しだしていた。

少女は少し、年齢よりも大人びて見えるタイプだった。

何かの習い事でもしているのか、スツ　と伸ばされた姿勢の良さが、大人びた雰囲気と拍車を掛けているのかも知れない。

きつとあの娘も、知らずに来てしまったんだろう……

男は過去の経験から、そんな少女の姿を見てとった。

男は学園の購買へ納品している業者なのだが、年に何度か、この様に徒歩で登る者を見てきた。大概是転校してきた生徒とその親と言う取り合わせで、後は背広を着たセールスマンらしき者、登山者風の者、それぞれである。

「佐久間学園へ向かうんかい？」

男は少女の隣に車を止めると「ここから学園までは結構あるんだ、良かったら乗っていくかい？」と、声を掛けていた。

何度かこうやって徒歩で登る者を助けた事がある。

大概の者が半分も行かない内に後悔するのを知っていたし、車の者が徒歩の者を乗せていくのが、地元では半ば暗黙の了解のようになっていたからだ。

声を掛けられた少女は歩みを止めると、声の主へと向き直った。見れば、額に汗の一つもかいた様子がない。季節は春を過ぎたばかりで爽やかな気候とは言え、かなりの上り坂を徒歩で来たとは思えない程であった。

少女はその顔と同様、涼やかな微笑みをたたえたと

「ありがとうございます。ですが今日の様に清々しい日には、こうして森の間を歩きたいと思います。どうぞお構いなく」と言った。

最近の若者にしては丁寧な応対をするものだ。男は丁寧な受け答えに感心すると同時に、凜として良く通る声に、一瞬、背筋がゾクツとする様な何とも言えない不思議な感覚を覚えた。

「だ、だけど、ここからだともまだまだ遠いよ。見た目はなだらかで良いけど、学園へ着く頃にはこれが結構疲れるんだ」

実はこの男もまた、山の麓から佐久間学園まで一度歩いたことがあった。

これでも普段から歩く事には自信をもっていたハズなのだが、以外とこの先からが長い　男はその時の事を少女に語った。

「ご心配ありがとうございます。ですが、足には自信がありますので」

しかし少女はそれでも大丈夫だと男の申し出を断っていた。

「そうかい？　それじゃ無理にとは言えないな……ところで君は転校生？」

「はい、今日から佐久間学園へ転校して参りました」

「やっぱりそうか……いやね、佐久間学園は私立だから結構転校生とかが来るんだけど、中にはこの山道の事とか知らない親子がいてね。バスで下の雑貨屋までは来るんだけど、そこから歩かなくてはならないのを聞いて、わざわざタクシーを呼ぶ人もいるんだ。俺も何度かそんな親子を乗せたことがあってね、君もその口かと思ったんだよ」

男がそう言つて気さくに笑うと、少女もつられたように微笑んだ。それは近頃の女子高生の様に、大きな口を開けて所構わず下品な笑い声をあげるモノとは違っていた。少女は軽く口に手を当てると、愛想笑いとも思えぬ微笑みで答えるのである。

いかにも絵になった。

男はそんな少女の微笑みを見てみると、なぜだか清々しい、不思議な感覚に陥る。

佐久間学園には金持ちの令嬢子息が多いって事だが、きっとこの娘はそう言う家の育ちなのかも知れない　男は、少女の立ち居振る舞いに、どこか普通とは違ったモノを感じとっていた。

しかし……どこかの令嬢にしても、余程礼儀作法に厳しい家に生まれているのだろう。普通の高校生ならば丁寧な物言いが逆に不自然に見えるものだが、この少女は全く自然で清々しい。スツキリと

した美人顔に、黒く、癖のない長髪が大人びて見えるが、それがいかにも似合っていて好感がもてる。

そして何よりも、真っ直ぐ見つめて来る瞳が吸い込まれそうなほどに　　男は一瞬、我を忘れて少女を魅入っていたが、五月の、一陣の爽やかな風に救われた。

「さ、さてと、それじゃ俺は先に行くけど……そうだ、君の名前とか聞いても良いかな？　これから、学園で会うかも知れないしね」

男は少女に魅入ってしまった事を誤魔化すかの様に、少し大きな声でまくし立てるようにしゃべっていた。

「ええ、かまいません」

少女はそんな男を気にするでもなく、相手の瞳を真っ直ぐに見据えながら答えた。

私の名前は

榊、榊乃亞と申します。

其の二：始まりの夜

はじまりの夜

和田美智子が壁掛けの時計に目をやると、針は後少しで10時を指そうと言うところだった。

「あら、もうこんな時間なのね」

夕食後、友達の国府田雅美に誘われて、彼女の部屋で紅茶を楽しんでいた美智子だったが、佐久間学園の寮では10時以降は自室に戻っていなくてはならないと言う規則がある。

そろそろお茶会もお開きの時間なのであった。

そんな美智子の声につられ、雅美も時計に目をやると

「本当だ……早いよね10時なんて」

と、未練たつぷりの言葉をはいた。

「でも仕方ないわ、寮規なんですもの」

私立佐久間学園に通う生徒は、地元の生徒とごく一部の例外を除いて、全員が寮に入って生活をしている。寮には昔ながらの規則があつて、生徒はそれを遵守しなければならなかった。

とは言え、今時の高校生に取って、夜の10時などはまだまだ宵の口にもならない時刻である。雅美にしてみればただでさえ娯楽の少ない寮での生活、寮規の遵守よりも、退屈な時間をいかに過ごすかの方が大問題であつた。

「ね、もう少し寄ってかない？別に見回りが来るわけでも無いんだし……」

そう、寮規と言うものの、別に教師達の見回りがある訳ではない。全ては生徒達の自主に任されている。

よって、規則を真面目に守っている生徒もいれば、そうでない者

もいるのだが、和田美智子に関して言えば雅美の誘いに乗る事はまず無かった。

「ごめんね、私ももう少しお邪魔していたんだけど、少しが少しだけで終わりそうに無いから……今日はもう戻るわ」

「もう、美智子は優等生なんだから」

雅美はわざとらしく頬を膨らませたが、その実、和田美智子は本当に優等生だった。

佐久間学園は、各界の有力者や旧華族と言った家柄の令嬢子息が集まる事で有名なのだが、美智子はまさに、その代表的な存在だった。

美智子の父である和田道広は、経済界では知らぬ者の無い資産家であり投資家で、資産総額は何十億とも言われている。しかも家柄は、江戸時代から続く旧華族と言う格式を持ち、佐久間学園の中でも指折りの中に入っている。

そんな家に育った美智子は、父親の道広から『自由奔放に育てすぎてお転婆が直らない』などと言われているモノの、どうして、学力は常に学年上位に顔を出し、お茶やお華はもちろん、礼儀作法などにも一通り精通した立派なお嬢様であった。

とは言え当人は、そんな事などおくびにも出さず、誰とでも明るく気さくに付き合う。そんな性格の良さは、男女を問わず好かれる要因となっていた。

「それじゃ、また明日ね」

雅美のわざとらしい表情につられて微笑みながらも、やはり美智子は腰を上げる事になった。

背中まで届くセミロングの黒髪が軽く揺れる。

「ま、しょうがないか」

雅美も今度は引き留めなかった。

雅美は江戸っ子の父親に育てられたからか、こう言った時に、未

練たらしい事を引きずるような事は無かった。たとえ一度は引き留めようとしても、他人に無理強いする様な事はしなかったし、気持ちの切り替えも早く出来るのである。

雅美は美智子の様に財閥の出でも無ければ華族と言う訳でもない。性格も父親の血を引き継いだのか、佐久間学園では珍しくチャキチャキの江戸っ子と言った活発な女の子で、性格の通りに髪の毛も短めにしている。

こんな正反対の様な性格の二人だが、和田美智子には、そんな雅美の竹を割った様な性格と常識をきちんと持ち合わせているところが性に合うのか、入学してからにつき合いで、既に何年も一緒に過ごしてきた様な親友同士の関係になっていた。

「それじゃまた明日。気を付けてね」

二人の部屋は、空き部屋を挟んで二つしか離れていないのだから、気を付けるも何もないのだが、雅美はドアの外に出て美智子を見送った。

これはどちらが遊びに行ってもそうなのだが、お互いが、お互いの部屋の中に入るまで見届けるのが習慣になっていたのである。

その日の夜も、いつもの様に雅美は美智子を見送った。

じゃあね　と、美智子も手を振り返す。

そして二人は、お互いがお互いの部屋の中へと入るのを見届けたのであった……

「なんだか、外が騒がしいな……」

雅美が異変に気が付いたのは、明日の予習をしていて、ちょうど一息入れようかと思った時だった。

寮規が緩いとはいえ、学力試験まで優しいわけでは無い。むしろ佐久間学園は試験に関しては厳しい方で、結果如何では直

ぐにでも補習などの罰が待っている。それだけは避けようと、雅美は嫌々ながらも勉強していたのだった。

10時を少し回ってから始めたから、ちょうど一時間。一つの教科が終わわり、キリの良い時間と言う事もあって紅茶でも飲もうかと思った時だった。

紅茶通の美智子からもらった高級な茶葉を使おうと、電子調理器の上にポットを載せた時である。廊下から、何やら人の悲鳴の様な音が聞こえてきたのであった。

「な、なんかあったのかな……」

学園の寮では大きな声を出して騒ぐことは禁止されている。第一、この寮の中でそんな事をする生徒は居ないはずである。

雅美はその騒ぎ声が気になって、外の様子を確かめようとドアのノブに手を掛けた。瞬間、今までの様な騒がしさとは違い、緊迫した声が飛び込んできた。

「イヤァ　　！！」

夜の静寂を切り裂くかの様な悲鳴に、一瞬、ドアノブに手を掛けたまま固まってしまったが、次の瞬間、雅美は一気に部屋の中から飛び出した。

「み、美智子！？」

驚いた事に、そこには、怯えながら必死に何かから逃げ出そうとしている和田美智子の姿があった。

「どうしたの美智子！」

雅美が近寄ると美智子は、今度は大きく手を振って、何かを追い払おうとしている。

その激しさは、見ていて異様だった。

目の前にいる自分の存在には気が付かず、何も無い空間に向かっ

てうつろな視線を向けて大きく手を振りながら、何かを追い払おうとしている姿はどう見ても異様としか思えなかった。

しかし雅美は、辛うじて友人を助けなくてはという思いが働いたのか、まずは美智子を落ち着かせようと、振りがざす手を押さえ込もうとした。

「ちよ、ちよつと美智子、落ち着いて!!」

しかし、必死で抵抗する人間を押さえ込む事は至難の業である。巧く押さえることが出来ない。

ど、どうしたって言うの!?

雅美は、彼女がどうして怯えながら悲鳴をあげているのか解らなかったが、とにかくこのままでは埒があかない、取りあえず落ち着かせようと、美智子の手を押さえ込もうとした……しかし、抵抗が思いの外大きく上手く行かない。

体格的にはあまり変わらない雅美だったが、美智子の力が思いの外強かったのだ。

と、とにかく落ち着かせなきゃ……でも手を押さえたのじゃダメだわ　雅美は美智子の抵抗があまりにも激しかったので、手を押さえる事を諦めた。その代わり、美智子の体を強く抱きしめてとにかく座らせようとした。

「美智子、落ち着いて!美智子!!」

雅美が耳元で大きな声を出したが、しかし美智子は一向に落ち着く様子を見せない。

「解る?私よ美智子!ね、落ち着いて」

この騒ぎに、他の寮生達が気が付かないはずはない。しばらくすると、各部屋から何人かの生徒達が顔を出してきた。

がしかし、美智子の異様な様子を見て状況が掴めなかったのか、誰もどうして良いか解らずに、近づく事も躊躇っている。

そうこうしている間にも、美智子は何かに抵抗するかのよううめきながら、大きく体を左右に振り続けていた。

「先生を呼んで来て！早く！！」

たまらず雅美が叫ぶと、三人の同級生達が階下に走った。

「美智子、解る？私よ、落ち着いて！ね、とにかくもう大丈夫だから！！」

周りに集まった者の中には好奇の目を向ける者も居たが、そんな事はお構いなしだ。雅美は美智子に向かって呼びかけ続けた。

すると美智子は、一度体を大きく揺らしたのち、一気に体の力が抜けたかと思うと、そのまま気を失った。

私は私よ……誰のモノでもない

「なに？美智子！私は私ってどういう事？」

雅美は、和田美智子が気を失う直前に、そう呟くのを聞いた気がした。

「以上が、和田美智子の親友であり、今回の騒ぎに居合わせた国府田雅美および、周囲で見ていた生徒達の話をもとめた結果です」

場所は学長室、赤岡は寮で起きた事件の報告を受けていた。

「その後、生徒達に呼ばれた真鍋先生まなべが対応し、一端は保健室で様子を見ていたのですが、和田美智子が一向に目を覚ます気配が無かったので、急遽救急車を呼んで友田総合病院へ搬送したと言う事です」

「そうか……やむを得まい、生徒の体の方が大切だからな。で、ご両親への連絡と友田院長へは？」

「はい、ご両親への連絡は友田病院へ搬送された時点で完了してあります。それから院長先生へは、この事が外部に漏れない様に話を付けておきました。もつとも、和田氏と院長先生はお知り合いだと思います、その点は、先生の方が心得て下さいました」

「ありがとうございます」

赤岡は革張りの椅子に、深いため息と共に身を沈めた。

報告しているのは、佐久間学園で事務をしている菊池という青年だったが、赤岡が信頼を寄せるだけあって、的確な対応の仕方だった。

細かい所まで気を遣い、何より迅速に対応するのが良い 今
回の事に関しても赤岡は菊池の対応に満足していた。

しかし……それで事件の処理が終わったわけではない。

赤岡はこれからの事を考えると頭が痛かった。

佐久間学園は古くから続く全寮制の、知る人ぞ知る名門校である。各界の実力者や、旧華族と言った家柄の生徒が集まり、それがまた評判を呼ぶのか、決して安くはない入学金や寄付を払っても多くの入学希望者がいた。

少子化の昨今、名門と呼ばれる私立校でも生徒を確保するのは難しくなっているのだから、そう言った点、佐久間学園は恵まれていた。

しかし、だからこそ今回の様なトラブルは致命傷にもなりかねない。

名門と呼ばれる家系が一番に気を遣うのは体面だ。

それは古ければ古い程に異常なまでの執着を持ち、そしてそれに対しての嗅覚も鋭かった。だからこの様に、事件と呼ばれるモノが一番嫌われるのである。

噂とは怖いモノで、一度悪い噂が立つとそれは瞬く間に世間に広がる。

しかも噂は、人々の想像や思惑によって勝手に一人歩きし、ドンと悪いイメージばかりが強調されてしまうのだ。

もちろん、システムの面で不備があるのなら学園側が悪いとも言えるのだが、生徒個人が引き起こした事件でも、学園の責任を問われる事がある。

なので、今回の様なケースではキチンと原因を究明し、早急にかるべき対処をしておかなくてはならない。

赤岡はその点の処理の仕方には自信があつた……が、現時点では情報が少なすぎて手の打ちようがない。

和田美智子が意識を回復するのを待ち、本人から事情を聞くのが一番なのだろうが、それだけでは済まないのではないかと、赤岡は彼自身の持つ勘がそう囁くのを感じていた。

「それで……和田美智子君の容体は？」

本来ならば一番最初に確認しなければならない事であつたが、だからこそ、聞くのが怖かつた。なぜなら、和田美智子の変質者などの何者かによつて襲われたのではないかと、そう思ったからである。

もしその予想が当たっていたならば、学園始まって以来の大事件であるし、正に命取りともなりかねない出来事である。

全寮制の学園にとつて保護者への信頼感を失う事は死に等しい。

赤岡が確認するのを躊躇うのも、そんな恐怖感からだつた。

菊池もその点に付いては十分理解しているのだろう、昨晚、美智子が病院へ搬入された時点で直ぐに駆けつけていたし、今日の朝も病院へまわつて彼女の容体を聞いていた。

「はい校長、その点に付いては心配無いそうです。今はまだ、意識を回復してませんが、彼女に外傷らしきモノはなく、昨晚の騒ぎの時には衣服に乱れた形跡がありました。それは取り押さえる時

のものと言つことです」

「うゝむ……」

赤岡は、ひとまず最悪のケースだけは回避出来たという安堵のため息を付いたものの、事件の事を思うとやはり気が重かった。

「菊池君、それで彼女が今回の騒ぎを起こした原因は、何か分かったのかね？」

「いいえ、そこまでは」

それもそうだろう、昨晚の事件は突発的な出来事であつたし、逆に、短い間でこれまで状況を把握している菊池は、まこと優秀と言つて良かった。

「しかし……」

菊池は、彼にしては珍しく語尾を濁した。

「しかし？　何かあつたのかね」

そんな菊池の態度に、赤岡の不安が増した。

「いえ、和田美智子が病院へ搬入される時、国府田雅美が彼女の部屋に着替えなどの必要なものを取りに入つたらしいのですが、その時、部屋の窓が全開になっていたそうです」

「窓が全開に？　それが何か問題なのかね」

赤岡は意味が判らず問い返していた。

「はい。まさかとは思いますが、もし犯人がいた場合、窓から逃げた事も考えられます」

「しかし……確か和田美智子君は一年生だろう、部屋は寮の最上階5階の中央に近い所だと聞いているが、その高さで考えられるのかね？」

「考えられない事でもありません。窓の外には、ちょっとした庇が出ていて、気を付ければ人間が動き回る事も出来ます」

「だが、庇はそれ程幅があるわけでは無いだろう。それに、隣の部屋の庇とは間があいているし、一時的に身を隠す事が出来たとしても、そこから逃げ出すことは困難だと思えるが……」

赤岡は寮の建設にも関わっていたから、庇の状況が手に取るよう

に判っていた。

寮の庇はしっかりしていて、一時的に身を隠す程度ならば問題は無い。ただし、隣の部屋の庇へは、ちょうど50cm程度の間があいているのだ。

地上での50cmならば大した距離ではないが、5階という高さで、しかも狭い庇の上では並の距離ではない。余程高い所に慣れた者でなければ、とても移動出来る距離とは思えなかった。

「ですが、可能性としては完全に無いとは言いません」

菊池にしても信じられないという思いの方が強かったのだろうが、彼は、問題を調査する上で、どの様な可能性でも考慮に入れなくてはならないと考えている様だった。

「もしも今回の事件を調査するのでしたら、多角的な視点で行うべきだと思つのです」

確かに、世の中には常識で計れない事もある。

赤岡のような立場にいと、無意識に常識に捕らわれたり、学園の都合の良い方向で物を考えがちで正しい判断が出来なくなりがちだった。

「うむ、君が言いたいことは解つた。どちらにしても、今回の件は徹底的に調査して原因を究明し、何らかの手を打たねばなるまい」

この時既に、今回の件はこの男に調査させよう。赤岡はそう思っていた。

事件が起きてからの対応や処理のしかた、原因に対しての考え方を見る限り、菊池は実に優秀な人間だと評価を新たにしたからだ。

「菊池君、本来の仕事からは外れると思うが、今回の件は君に調査してもらいたいのだが」

赤岡としてはこれ以上無い人選だったし、菊池にしても望んでいた節がある。

全力を尽くします

と、菊池は自信溢れる顔で答えるのだっ

つ
づ
く

た。

其の三：兆し

兆し

「そう、じゃあやつぱり、君もそれ以上の事は分からないんだね？」
「はい……美智子とは10時に別れて、それからあの騒ぎがあるまで会っていません」

菊池はさつそく事件の調査を開始していた。

赤岡の信頼に応えたいという気持ちもあったのだが、自身、難しい問題に直面すると逆に闘志がわいてくる性格なのである。それに、問題に対して早め早めに行動しないと気が済まない……そんな性格も手伝っていた。

そんな菊池が一番最初にした事は、もう一度、あの夜の事を当事者達へ聞き直す事だった。

人間の記憶と言うモノは面白く出来ている。記憶は、時が過ぎるに比例して薄れて行くモノだが、直前の映像を全て思い出せるかと言えばそうでもない。

特に学習の為の記憶では、一度時間を置いた方が理解度が高くなる場合もある。それと同じ事かは解らないが、冷静になったただからこそ、思い出す事があるかもしれない。と、菊池は考えていたのだ。

しかし現実には、そうそう都合良く行くわけではなく、あまり成果は上がらなかった。

和田美智子と一番仲が良く、事件の第一発見者でもある国府田雅美なら何か心当たりがあるかとも思われたが、彼女は叫び声に気が付いて飛び出しただけで、それ以前の事は全く知らないと言っただからしょうがない。

国府田雅美に期待していた部分もあったのだが、どうも、そう簡単に行きそうになかった。

「最近、和田美智子君が悩んでいるとか、そう言った話は聞いたことは無いかい？どんな些細なことでも構わないのだけれど」

それでも一応、多角的に情報は収集しておくべきだ。

「美智子が悩むなんて、そんな事は絶対に無かったと思います。確かに誰でも悩みの一つや二つあるかも知れないけど、勉強だって常に上位だったし、経済的な面で悩むような家じゃないし……そんな事で悩むんだったら、よっぽど私の方が悩み事が多くて夜も眠れません」

雅美は冗談のように言ったが、友人の事が心配なのか顔は笑っていなかった。

菊池はそれからいくつかの質問を続けたが、結局、収穫になるような話は聞くことが出来なかった。いや、和田美智子がノイローゼになるような悩みを持っていなかった事が分かっただけでも収穫だったのかも知れない。

つまり、和田美智子が、自身の問題であのような騒ぎを起こしたのではなく、何かしらの外的要因が引き金になった可能性が高い事が分かったからである……

しかしそれは、菊池や学園に取って望まない結果だ。

これはやつかいな事になるかも知れない。この時菊池は、最悪のシナリオも考えなくてはならないと思っていた。和田美智子自身の問題でないとすると、やはり暴漢の説が浮上してくるからである。

菊池は国府田雅美からの話をあきらめると、今度は和田美智子の部屋の調査をする事に決めた。

本来ならプライバシーに関わる面からも、菊池自身のポリシーからも気の進む事では無いのだが、菊池は、和田美智子が未だ意識

を取り戻さず眠りに付いている時、電話で彼女の父である和田大造に、部屋を調査することの了解を得ていた。

後々になって気変りをされたり、和田美智子自身が事件の真相を隠してしまわないかを心配してのことだった。

こういった先々の事を、菊池は時として行き過ぎの様に思われても手を打っておくタイプなのである。

事件のあと、部屋には誰も入れない様にと鍵を掛けてあった。部屋に入るには、寮の管理人が持っているマスターキーか、菊池自身が持っている鍵を使うしか無い。

「これも調査の為に必要な事だ」と、菊池は自分を納得させる為か、小さく声に出してから、一呼吸置いてゆっくりと鍵を回した。

佐久間学園の寮は、寄付金が十分に集まる事もあって生徒一人ずつに個室が与えられている。広さこそそれ程でもなかったが、クローゼットは備え付けのものがあつたし、冷暖房はセントラルヒーティングによる集中管理。各部屋にはユニットバスも付いていて、下手なビジネスホテルよりも設備が良い。

ベッドと机、それから小さいテーブルを入れればくつろげるスペースも限られてくるのだが、部屋に入って一番最初に思ったことは、和田美智子の部屋は整理されていて、手狭な感じを受けない清潔感のある部屋であると言う事だった。

次に、芳香剤なのかそれとも香水からなのか、上品な柑橘系の香りが漂っていると言う事。

菊池は罪悪感を感じたが、調査のためだと、自らを奮起させて部屋の中へと足を踏み入れた。

さて、どうしたものか……

今まで色々な事をやってきたが、この様に、他人の部屋で刑事の

真似事をした経験などはない。調査する手順も分からなければ、警察の様に証拠を分析する手段も持ち合わせていない。

菊池は部屋の入り口で立ち止まり、どこから手をつけて良いものか考えを巡らせた。

少し、事件の事を振り返ってみるか　菊池は今までに分かっている事を整理する事で調査の糸口を見つけられるかも知れないと、これまでの事を思い返してみた。

事件が起きたのは昨晚。理由は分からないが、何らかの原因によって突然、和田美智子が騒ぎを起こした。国府田雅美が取り押さえるのにだいぶ苦労したと言うのだから、彼女は相当混乱していたのに違いない。

薬物かとも思ったが、それは考えられなかった。

事件の様子を聞く限り、和田美智子の抵抗は激しかったという。薬の知識などは無いが、そんな激しい反応を見せる薬を使用したならば、美智子自身、薬を使った痕跡を消す余裕など無かったハズである。

事件直後、国府田雅美を除けば誰もこの部屋に入っていない。

和田美智子を庇うために、国府田雅美が証拠を消したとも考えられないが、収容した友田病院では血液検査もしているハズで、嘘は遠からず判明する。

では何が原因なのか

和田美智子が病院に運ばれる際、着替えを持たせようと国府田雅美がこの部屋に入ったとき、彼女の部屋は窓が開いていた以外に変わった様子は無かったと言う。

それは本当の事だろう。現にこの部屋は良く整頓されていて、和田美智子のきれいな好きな性格が伺えた。

では何が

菊池は部屋の中で、仁王立ちになりながら考えを巡らせていた。そうだな……やはり薬物の可能性は低いに違いない　　和田美智子の性格や状況から考えても確信を持てる。

しかしそれは、事件が最悪な方向に向かっているに過ぎない。なぜなら、ますます暴漢の可能性が高くなるからである。

「一つ……確認しておくか」

菊池は最悪なシナリオが可能であるのかを確かめるべく、部屋の窓へと歩を進めた。

窓の庇である。

部屋の窓を開け、窓枠に手をつきながら身を乗り出してみる。

見れば、窓枠から足場となる下の庇までは1メートル程の高さあったが、そこに降り立つ事は容易に出来そうに思えた。

庇の大きさは、窓よりも少し大きめに作られている。

窓は、比較的大きめに取られていて、横幅は2メートル程だろうか、庇の幅はそれよりも心持ち長い。そして、隣の部屋の庇までは、大体50センチ程度の空間が空いていた。

庇の出っ張りは約30センチ。人間が立って歩くには十分なスペースに感じられる。耐重性に関しては何も問題がない。建設業者への問い合わせで、庇はコンクリート製で、十分な重さに耐えられる作りになっている事を確認していた。

しかし……本当にここから犯人が逃げられたのであろうか？

菊池は改めて五階の窓から庇を眺めたが、半信半疑になってしまった。

確かに、高所で作業する人達は、命綱もそこに狭い空間だろうが自由に行き来している。とは言えこの様な庇を伝い、わざわざ

中央部に近い和田美智子の部屋まで行くものだろうか？

そうだ、もしその様な人間が居たとして、犯人は一体、どこから庇に飛び移ったのだろうか？

考えられるのは、非常階段からこの庇に飛び移る事だが……菊池は窓から顔を出し、左側にある非常階段の方を確認した。

美智子の部屋はちょうど寮の中央部分に位置していて、非常階段からは結構な距離が見て取れる。

確かに、非常階段から庇を伝ってこの部屋に飛び移れない事も無いが……菊池はあらゆる可能性を考慮に入れようと考えた。しかし、一方でどうしても納得が出来ない事も事実だった。

どうして和田美智子の様な、一番中途半端な位置にある部屋に潜り込んだのだろうか？ もし襲う覚悟で進入するならば、一番近い場所を選ぶハズではないか？

たまたま、和田美智子の部屋の窓に、鍵が掛かっていなかったからなのだろうか……

いや、それにしてもやはり不可解である。

菊池はもう一度、庇を確かめてみた。

別に高所恐怖症と言う訳ではなかったが、それでも、五階の窓から下を覗くと高さを感じる。人間が一番恐怖を感じるのは、これくらいの中途半端な高さだと聞いたことがあるが、それを実感できた。この高さの中、決して広いとは言えない庇の上を長距離移動できるのだろうか……自分だったなら、隣の部屋に行くのが精一杯だろう。

菊池は素直な感想を持った。

するとその時、菊池の中で急速に一つの事が思い浮かんだ。

そうか、隣か！！

そう、隣の空き部屋の事であった。

そうか、もし犯人がいるならば、あの騒ぎをやり過ごす為には隣の部屋に隠れていれば良い。

あの場合、犯人がいると思う者はいなかっただろうが、もしそうなったとしても、誰も空き部屋の事を調べはしなかっただろう。

そして犯人は、騒ぎが収まった頃を見計らい、悠々と部屋のドアから外に出れば良いのだ……

菊池はこれまでの疑問が、全て溶けきってしまったかのような興奮を憶えた。

思わず握りしめた拳に力が入る。

が、しかし、それは菊池や学園側が、一番考えたくない事であると気が付いて愕然とした。

もし、もしも犯人が、隣の部屋から出入りしたのだとしたのならば、それは学園内部の者としか考えられないではないか。しかも、教師や寮の管理人などの犯行だとしたら この考えに行き着いた瞬間、菊池は膝が震えて立っているのも危うくなった。

可能性から言えば薬やノイローゼなどよりも断然高い。

しかもそれが、教師や寮の管理人の犯行であるならば、佐久間学園の存亡に関わる一大事である。

そう、特殊な学園だけに命取りなのだ 菊池は事の重大さを感じずにはおれなかった。

しかし一体誰が？

菊池は窓枠に手を付いてうなだれた。

すると、どこからともなく、誰かの視線が自分に向けられている気がした。

今は授業時間中で生徒は誰もいないはずである。しかも寮の窓は、学校の方向とは逆の、裏山の方へ向かって取り付けられている。裏山には確か、小さな社が建っていると言うことだったが……菊池はもちろん行ったためしもないし、生徒達の中には、そんな建物があ

ること自体知らない者が多い。

しかし菊池は、そんな山の方から視線を感じたのである。

単に気のせいと言われればそれまでなのだが、どうにも気になって仕方がない。菊池はどうしても放っておく事が出来ず、しばらく視線の元を探していた。

すると　そこにある一人の男の姿を発見した。

アレは……宇賀神先生か？

遠目であることもあって少々ハッキリしなかったが、それでも菊池は、裏山に続くけもの道の様な所から、こちらに向かって視線を向ける男を宇賀神勇うがじんいさむだと確信する事ができた。

「嫌な者を見た……」

菊池は宇賀神の事が嫌いだった。

一応「先生」と呼んではいたが、それは生徒の手前からであって、本来ならば名前を呼ぶことすら遠慮したいと思っている程である。

それには色々理由があるのだが、一番の原因は宇賀神の性格にあった。

宇賀神の性格は暗い……いや、暗いだけならばまだ良いのだが、何を考えているのか分からないと言ったタイプだった。自分の意見を何も言わず、影で勝手にひねくれる性格なのだ　菊池は以前にあった出来事を思い出していた。

その昔、ある期限までに提出してもらわなくてはならない書類があったのだが、宇賀神の分だけがなかなか出て来なかった。菊池は事務処理の為にその書類がどうしても必要だったので、仕方なく宇賀神に書類の提出を促したのだが……それに対して彼は、理由なく逆恨みをしたのである。

もちろん宇賀神の方に非があるのは明らかである。

ところが彼には、自分が悪いと言う感覚が全くないのか、提出を促しただけの菊池に、敵意の籠もった視線を送るようになったのだ。それも、どこか異様な目つきなので、菊池は今思い出しても気分が悪くなった。

菊池の中に、あの時の異様な視線を送る宇賀神の姿が蘇ってきた……そして、それと同時に不安の炎で胸が押しつぶされそうな感覚に陥った。

まさか奴が？

その考えに思い当たった時、既に、宇賀神に対して先生と言う敬称を使う気も起きなかった。菊池の心の中では、急速に宇賀神が犯人であると言う考えが固まっていたからである。

何事にも慎重をきする菊池であったが、これだけは自分の直感を信じて良いと思った程、その思いに迷いは無かった。

いや、絶対に関係しているに違いない 教師なら部屋の鍵を複製する事も簡単に出来るし、たとえ寮内を歩いていたとしても、見回りとさえいばどうとでもなる。

菊池の思考は宇賀神を犯人と仮定したとたん、ドンドンと回転して止まらなかった。

手にはじつとりと汗をかいている。

そうだ、そうに違いない 菊池は口にだして呟きながら、宇賀神のいる場所へと視線を戻した。
すると、もうそこには宇賀神の姿は無くなっていた。

消えた？

まるで手品のように姿を消した宇賀神に、菊池は得体の知れない

恐怖の様な感覚を憶えた。

まさか本当に消えてしまったのか？

そんな馬鹿な……いや、そんなハズはない、きっと考え事をして
いたから、奴がどこかに行ったことに気付かなかったただけだ。そう
に違いない。

菊池は不安になる気持ちを抑えるために、そう思いこむことにし
た。

そうだ、早急に隣の部屋を調査しなくては……

何事も即時に実行する菊池が、和田美智子の部屋を出たのはそれ
から10分も後の事だった。

つづく

其の四：見上げる

見上げる

「よう雅美」

昼食後の休憩時間、国府田雅美は一人になりたくてわざわざ人気のない校舎裏へと逃れていたのだが、そこで、静寂とは無縁のあまり出会いたくない人物から声を掛けられてしまった。

「何よ貴弘」

顔を見なくとも声だけで分かっあまみやたかひろてしまう。

学園で一番お気楽な男……雨宮貴弘その人だった。

「なんだよ、随分な反応だな」

「そうね、あんたのおちやらけた顔を見たら、さらに憂鬱になったわ……」

「な、なんですと!」

雅美が精一杯の皮肉で迎えると、雨宮は大げさに驚いてみせる。そう言うところがおちやらけてるのよ　と、雅美は言ってみたくはなかったが、今日はそんな言葉を口にするのもうつつとしい。代わりに、ジロリと凄みのある視線を向ける事にした。

雨宮貴弘とは、佐久間学園に入学してからの付き合いだった。

とは言っても、恋仲などと言った艶のある関係ではない。

入学式当日、クラスの女子全員に声を掛けていた雨宮に、雅美も声を掛けられて以来の、単に仲のいいクラスメートと言う位置づけである。

普通ならば、お気楽な性格とひょうひょうとしてつかみ所の無い男などは、あまり近寄って欲しくないタイプなのだが、不思議と雨宮に関して言えば、なにかと気があって他の男子生徒よりも気楽に

話せる仲になっていた。

雨宮は、どこか由緒ある神社の跡取りだと聞いた事があるのだが、言われてみれば、そう、どこか坊ちゃん坊ちゃんしたところも見受けられる。

一度雅美は、雨宮にその事を聞いた事があつたのだが、結局本人がはぐらかすのみで、真偽の程は分からず仕舞いだつた。

とにかく、どこか憎めないいたずらつ子の雰囲気雨宮と、なぜかは判らないが馬があつて、本当に軽口を言い合うような、そんな気軽な関係であつた。

しかし、今の雅美に取つては、そんな雨宮の相手をしているだけの余裕が無かつた。

そう、昨夜の事で頭がいっぱいだつたからである。

「悪いんだけど、用事が無いなら一人にしておいてもらえない」

と、雅美は単刀直入に用件だけを伝えた。

かなり乱暴な言い方だつたが、雨宮がこれしきの言葉で気分を害する様な男でない事を知っている。それに雅美自身、江戸っ子の祖父の影響からか、遠回しなやり方はあまり好みでは無い。

そして雨宮の方も、そんな雅美の性格を良く飲み込んでいた。

「お前が珍しく悩んでるみたいだから、からかいに来てやつたんだけどな。やっぱり美智子の事か？」

「あんたも興味本位の口？」

雅美はやりきれない気持ちでため息をついた。

今日は、朝から同じ質問を繰り返されていたからである。

和田美智子がどうかしたつて本当？

和田がおかしくなつたつて？

美智子が何者かに……

確かに、全寮制という環境の中でこれ程の事件があれば興味を引

かない方がおかしいだろう。でもだからと言って、自分のクラスメートを興味本位だけで話のネタにするのはどうしても許せない

雅美は無責任な噂を流したり、興味本位な質問ばかりしてくるクラスメートが多い事を思い出すと、自然と憂鬱な気持ちになったり、憤りを感じずにはおれなかった。

良くTVなどで、芸能人などのスキャンダルを放送しているが、雅美にとって、あの手のモノが一番不愉快だった。人が人の不幸やプライベートをのぞき見て、訳知り顔で道徳や倫理を振りかざしたり、無責任な批判や同情を寄せるなど、これ程愚かな行為は無いと、思うからである。

しかし雅美は、今回のことでいかに他人が他人の不幸に関して無責任な興味を抱くのかを知った。

確かに、本気で美智子の事を心配する者も多かったのだが、それと同じくらいに、興味本位な者が多かったからである。

露骨に麻薬やノイローゼだと言いつ出す者もいて、雅美はそれらの無責任で無遠慮な者達に、やりきれなさで一杯になっていたのである。

「美智子の事、興味本位で話題にするなら、いくらあんだだって許さないからね」

と、雅美の口調がキツくなるのも無理はない。

しかし雨宮は、そんな雅美の態度にも平然とした顔でこう続けた。
「うーん、そうだなあ、興味が無いと言つと嘘になるけど……」

「な!!」雅美は雨宮を睨みつけた。

「貴弘、あんた見損なつたわ。あんた、普段はおちゃらけてるけど、こつ言うときだけは真面目に考えると思つていたのに」

「おいおい待てよ。オレがいつ、興味本位だけで美智子の事を聞いたよ」

と、雨宮は雅美の鋭い視線に出会って苦笑した。

「彼女の事はキチンと心配しているさ……ただ、どうして美智子が

あんな事件を起こしたのか、それには興味があるのさ」

「そのどこが違うのよ。無責任で興味本位な奴らと変わらないじゃない」

「オレの言ってる意味が判らないのか？」

雨宮はそんな雅美の視線に、困った顔を作った。

「オレは噂になっっているように、美智子が麻薬に手を出すような娘じゃない事を知っている。それに悩み事があってノイローゼになるような人間じゃないこともな」

「そうよ、美智子があんな騒ぎを起こしたのは、そんな理由からじゃ無いわ」

そうだ、美智子が麻薬やノイローゼなんかでは無いことは、この男に言われなくとも私が一番良く理解している。美智子はそんな事に逃げ込むほど、弱い人間ではないのだ。

「じゃあ一体、その理由って何なんだ？」

雨宮は、この男にしては珍しく真面目な顔をしていた。

「もし、その理由を作った人間がいるとしたら」

「理由、を……作った人間？」

「そうだ、犯人と言っても良い。そんな存在がいるとしたら」

犯人がいる。

雅美はその言葉に大きな衝撃を受けた。

「もし犯人がいるとしたら……」

「俺達はどうするべきなのか、だな」

雅美は無意識に避けていた考えを見つめ直した。

そうなのだ、美智子が麻薬やノイローゼではないとしたら、あれほど取り乱す理由はなんだったのだろうか。それはやはり、誰かに襲われたとしか……

「でも、あの時は誰もいなかったわ。私は事件の直後、美智子の部屋に入ったのよ。無人だった」

と、雅美は昨夜の状況を振り返ってみた。

「少なくとも、私が騒ぎに気が付いてからは、誰も見ていないわ」

「じゃあ、一体どうしたって言うんだ？麻薬やノイローゼじゃ無いとしたら、どんな理由があったんだ」

「そ、そんなの判らないわよ……そんな事」

「確かにな、俺達がどうこうする問題じゃないかも知れない。だけど、俺達にも何か出来る事があるんじゃないのか？」

雨宮は雅美を見つめながら「少なくとも、友達として何かをしたいとオレは思う」と、続けるのであった。

「私たちに出来る事……」

そうだ、私は美智子の為に何か出来るはずだ。周りがどう思おうと、自分だけは美智子の事を信じてあげよう。そして、もし犯人がいるならば　　雅美は心の中にかかっていた霧が、一気に晴れて行く様な気がした。

そして雨宮を、少し見直す事にした。いつもはへらへらとしていて、調子の良い男と言う印象なのだが、今見せる真剣な眼差しには胸の高鳴りさえ感じる。

何より、美智子の事を友達として心配し、そしてその友達の為に何かをしようと言う姿勢は、格好良く写った。

「な、なによ、意外と格好いい事言うじゃない。あんたのそう言う部分、良いと思うよ……」

「ん？俺に惚れたか」

「そう言う部分は嫌いだけどね」

と言って、雅美は笑った。

「でも、そうよね、私たちにも出来ること、あるはずよね……」

と、雅美は自分自信に言い聞かせるように言つと

「おう、そう思うぞ」

と、雨宮はそれに答えた。

そっか、貴弘はもう、事件に関して何か考えている事があるのね

……

「それで貴弘、私たちには何が出来ると思う？」

「むっ、そりゃ……色々に決まってるじゃないか」

「色々って？」

「そりゃ色々だよ……」

「貴弘……何か考えがあつて言つたんじゃないの？」

「アレだけキツパリと言い放つた割に、無計画なんじゃない？」

雅美は信じられないと言つた顔を向けた。

「そ、そんな顔しなくたって良いじゃないか。オレはあの事件の事、なんにも知識が無いんだぞ、対応のしようがないだろ」

と、雨宮は頭をかいた。

「だから、雅美の知っている事を聞きに来たんじゃないか」

「ははは……ま、この方が貴弘らしいか」

と、雅美は気兼ねなく笑った。

「……と、ここまでが事件のあらましよ」

昨夜の事を、雅美はなるべく順序立てて話したつもりだった。今朝一度、事務員の菊池に話していたので、説明は良くまとまっているはずである。

「聞いた限りじゃ、殆ど事件に関係するようなことは判らないな」

「そうね。私が騒ぎに気が付いた時は既に美智子は廊下にいたし、

その前の事は全く判らない状態だった。ただ……」

「部屋の窓か？」

「うん。だって今の季節、昼間は結構暖かくなるけど、まだまだ朝夕の冷え込みは厳しいでしょ？ 貴弘も知つてるとおり昨日の夜も冷え込みが激しかったじゃない。空気の入れ換えをするにしても開けっ放しになっていたのはちょっと不思議な気がするの」

「いや、確かに雅美の言うとおりかもしれない」

「貴弘もそう思う？」

「まあ、何も無いと言われれば反論出来ないけど、やっぱり疑問に思う事は確かだな。寮の中は殆ど集中管理の空調が利いていて空気の入れ換えなんて殆どしない。少なくとも、オレは昼間の内は窓を開けることがあっても、夜にはあまりしないな」

と、雨宮は腕を組んだ。

「そのほかには、美智子の部屋に手がかりになるような事は無かったのか？」

雨宮に言われ、雅美は記憶の糸を探った。

「あの時は結構焦ってたし、着替えを取りに入っただけだったからね……でも、見た感じではいつもの美智子らしい部屋だったわ」

美智子はきれい好きだからね　雅美は綺麗に整頓された部屋の様子を思い出した。雅美もどちらかと言えばきれい好きの方だったが、美智子の部屋を見ると、いつも叶わないと思ってしまう。

雅美の部屋は表面上綺麗になっているものの、クローゼットを開けられると困ったことになるのだが、美智子に関して言えばそれも無い。見えない所でも、キッチンと整理されているのである。

「うん、やっぱり変わったことは無かったと思う」

雅美はどう思い返しても、窓が開いていた以外、変わった点を見つけることが出来なかった。

「すると、やっぱり窓が開いていたことが関係しているのかもしれない」

「でも、それってどういう事……まさか本当に人が出入りしたって訳じゃないでしょ？　美智子の部屋は五階の、しかも建物のほぼ中央当たりにあるのよ」

多少、高所恐怖症の毛がある雅美には、五階と言う高さで人が窓の外を歩くなど想像出来なかった。

「それは判らないけどな……高い場所での工事を専門にしている人

にしてみれば、五階なんて高さは気にならないかも知れない。それに、雅美だって窓の所にコンクリート製の庇がついているの知ってるだろ？ アレだったら、人が歩くのも不可能じゃない」

「じゃあ、美智子は誰かに襲われかけた？」

と言つて、雅美は不安になった。

「何とも言えないが、その可能性が無いとは言いきれない」

雨宮は難しい顔で呟くと、ふらりと歩き出した。

「ちよつと、どこ行くのよ」

雅美も雨宮につられて歩き出す。

「いや、何となく美智子の部屋を見に行こうと思うんだけど」

「そんなの無理に決まってるじゃない。いくら二階まで繋がっているからって、女子棟に男のあんたが入っていける分けないじゃない。禁止されてるのよ……」
それに、今は美智子の部屋には鍵が掛かっているし」

「何言つてんだよ雅美。お前まさか本当に女子棟に男が入りしてないとも思つてんのか？」

「だ、だって、女子棟へ来るには二階の先生達の部屋の前を通らなくちゃ来られないじゃない」

「お前なあ……」

本当か？ と、雨宮は雅美の顔をのぞき込んだ。

「な、何よ、何でそんな顔するのよ」

「いや、なんでもない……雅美が意外な事を言うからな」と、雨宮は小さく笑った。

「ちよつと、その笑いは何よ！」

人を小馬鹿にして！

雅美はにやけた顔をしている雨宮の向

こうずねを、思いつき蹴飛ばしてやった。

「痛ってー！！」

「ふんだ！人様を笑う者には、神様の罰が当たるのよ」

痛がる雨宮に、雅美はそつばを向いた。

「って、神様の罰じゃ無くて、お前の足が当たったんだろうが！」

なんとでも言っただけさ　抗議の声を上げる雨宮に、雅美は

知らぬ顔を決め込んだ。

「それよりもさっき言った事、どういう意味なのよ。あんたは誰にも見つからずに女子棟へあがれるって訳？それに、さっきも言ったとおり美智子の部屋には鍵が掛かってるのよ」

やっと痛みがひいて歩みを再開した雨宮は「女子棟へ行くのは簡単なんだぜ」と、自信たつぷりにうなずいた。

「まず女子棟だけだな、あれは、非常階段を登れば誰にも見つからずに中へ入れる」

「でも、非常口には内側から鍵が……」

「まだ分かんねーの？」

と、雨宮は困った顔になった。

「なによ、もう一回蹴飛ばして欲しいわけ？」

「だからさ、その内側の鍵を、中の人間が開けたとしたらどうするんだよ」

何を分かり切ったことを　そう言いたげな口調だった。「つ

まり、彼女の部屋でご休憩……って言う奴らが、時間を決めて鍵を開けるんだよ」

「あ」

雅美はここまで聞かされて、ようやく理解することが出来た。

そ、そう言うこと……ね

「で、でも、美智子の部屋の鍵はどうするのよ、鍵は」

「開かない鍵は無いんだぜ」

「まさか、あんたが開けられるとでも言うの？」

「いや、まあ……開けられない事も無いけど、今はそれをやってる時間は無いな」

と、時計を見ながら言った。後少しで午後の授業が始まる時間だ

ったのである。

「も、分かんないわね。じゃ、一体何しに寮に行くのよ。しかもこのまま行けば寮の裏側に出ちゃうじゃない」

「何でって、だから美智子の部屋を見にな」

「だって今、それをやってる時間は無いって言ったでしょ」

と、雅美は、矛盾した話に行動が読めなかった。

「ああ、部屋の中に行くんじゃないや無くて、外から確認をしにな」

「外？」

「そうだよ。どれくらい高さがあるのか、それに人が庇の上を歩く事が出来るのか」

なんだ、そう言う事が 解ってしまえば簡単な話である。雨

宮は、美智子の部屋を、外から確認しようとしていたのだ。

「それならそうと、最初から言いなさいよ」

「最初からって、お前が早とちりするから悪いんじゃないか」

「あんたが、キチンと説明しないのが悪いのよ」

二人の間には、しばし、たわいのないやり取りが続いたが、それもすぐに終わりを告げた。目指す場所へと到着していたからである。

「ここが、美智子の部屋の真下か……」

雅美と雨宮の二人は、遙か五階にある美智子の部屋を見上げてみた。

寮は建ててからそう年月が経っていないので、まだまだ綺麗な色をしている。部屋の窓は裏山の方へ面していて、寮全体を見ると結構な大きさだった。

一階が食堂などの大きな施設になっており、二階が教職員用の部屋。そして三階から上が生徒達の部屋になっているのだが、新宿都庁の様に建物が二つに分かれていて、それぞれの棟へは二階を通らなければ行き来できない造りになっていた。

和田美智子の部屋は、女子棟のほぼ中央に位置していて、向かつ

て右側の部屋が空室になっており、さらにその右隣が雅美の部屋であつた。

「確かに、人間が庇の上を歩くのも、無理じゃないな……」

と、雨宮は庇を確かめて言った。

「でも、本当に美智子の部屋に、誰かが進入したのかしら？」

「さあな……」

「『さあな』って、もう少し真面目に」

と、雅美は言葉を切った。二人が立っている場所は、それ程の高さは無いものの、一面に雑草が生えていて地面が見えない。

雨宮が、しきりにその雑草を足でどけて地面を眺めていたからである。

「何やってんの？」

美智子の部屋を見てみたいと言っていたのに、今度は地面を眺めているなんて　　雅美には、雨宮の行動が理解できなかった。

「ねえ、何やってんのよ……」

「イイから、雅美も何かを探してくれよ」

と、雨宮は理由も言わずに、雑草を足でかき分けていた。

「何かって、何よ？」

「だからさ、ここに何かが落ちてないかだよ。もし犯人が庇の上を歩いていたのなら、何か手がかりになるようなモノでも……」

不意に雨宮の動きが止まった。

「ほら、見るよ」

雨宮は、地面に半ば埋まっていた小さな銀色の固まりを、拾い上げていた。

「それって……何？」

「ライターだよ」

こびりついた泥を落しながら「コレは自分でオイルを補充するタイプのライターで、強風の中でも火がつくって言う奴さ」

「それで、そのライターがどうしたって言うのよ」

得意顔でライターを見せる雨宮に、雅美はそれで？と、気のない表情で聞いていた。

「はあ？なに言ってるんだよお前。コレがどうしてこんな所に落ちてると思ってるんだ？これは、間違いなく犯人のモノだよ」

しょうがないな と、雨宮は困った様な表情で雅美を見た。

「だって、ライターなんてどこでも売ってるじゃない。それにどうしてコレが犯人のモノだと言えるのよ……」

何がなんだか解らない 雅美は雨宮の説明を待つことにした。
「あのなあ……じゃあ、どうしてこんな所にライターが落ちてるんだ？」

「どうしてって、そんなの誰かが落としたに決まってるじゃない」
「で、どこから落としたんだ？このライターは半分地面にめり込んでたんだぞ」

「そんなの、少し高い所から……」

ハッ

「じゃ、それ、五階から落ちた」

「それ以外考えられないだろう。ライターが地面に埋まるって言うのは、結構な高さから落とさなければならぬ。そう、ちょうど美智子の部屋がある五階くらいの高さか……寮にはライターの持ち込みが禁止されてるのは知ってるよな？」

「当たり前でしょ」

「まあ確かに、煙草を吸ってる奴らがそれをバカ正直に守ってるとは思えないがな。でも……」

「美智子は煙草なんて吸わないわ」

「だろう。じゃあどうしてライターが落ちているのか？それはライターを持っていた人間がいたからだ」

じゃあ、本当にそのライターは犯人が落としたモノ？ 雅美

は、漸く雨宮の結論に達すると、同時に複雑な感情に支配された。

誰かが部屋に進入し、そして美智子に対して何かを……悪い想像ばかりが浮かんでくるのがたまらなく嫌だった。

けれども……貴弘の言っている事、あながち嘘とは思えない。いえ、かなり信憑性のある事だと思える。

雅美はこの時点で、美智子の部屋に『誰か』が、進入した事を認めないわけには行かなかった。

ただ、犯人がなぜ、このようなライターを落として行ったのか？その事がのどに引っかかった小骨の様に……雅美の心にしこりとして残るのである。

雅美はもう一度、美智子の部屋へと視線を戻そうとした。と、その時

「あら？」

部屋の中で、何かが動くのを見た気がした。

「どうした」

と、雨宮もその声につられて上を見上げる。

「なんかあったのか？」

しかしそこには、声を上げるほどのモノは見つけられなかった。

「うん……今、部屋の中で何かが動いたように感じられたの。ただ」

雅美が見上げた部屋は、美智子と雅美の部屋の間にある空き部屋の方だった。

見間違いな 雅美がその事に気が付いて、雨宮に言おうとしたときだった。

「何をしているんだい」

二人は不意に、背後から声を掛けられた。

つづく

其の五：人影

人影

「何を……しているんだい」

寮の裏手、山側に面している側は普段から人影の少ない場所であった。

それもそのはず、あまり日があたらない割りには下草が脛のあたりまで伸びていて、歩くには煩わしい。それに、学園内で裏手を通り抜けて行く場所は全く無い状況であるからだ。

それから、この場所は部屋から一望でき、秘密ごとに向かない事も理由の一つであった。

現在、雨宮と雅美がいるものの、美智子の事が無ければ、二人も裏手には無用の人間であった。

よって、このような場所で不意に声を掛けられれば、雨宮達で無くとも大いに驚くに違いない。

まして二人は話に集中していたので、突然の来訪者に驚きもひとしおなモノになった。

「君は国府田君と……雨宮君だったね」

その人物は、決して少なくない生徒の、顔と名前を全て暗記している様だった。

「き、菊池さん!？」

雅美が声の方へ振り返ると、そこには菊池の姿があった。

雨宮も、突然声を掛けられた事に驚いたが、それ以上に自分の顔と名前が一致している菊池の記憶力に驚かされた。

たしか雨宮自身の記憶では、菊池と話をしたことは数回しか無かったはずである。

「き、菊池さん…… どうしてここへ？」

「ん？ どうしてって」

菊池は和田美智子の部屋から、この裏手に宇賀神らしき姿を見かけ、それを確かめに来たのだが、そこでちょうど、雅美と雨宮の二人を見かけたのである。

「君たちこそ、こんな場所で何をしていたんだい？ 愛の語らいをするには、少々雰囲気欠けると思うけどな……」

菊池は冗談の様に言っていたが、視線は鋭くこちら側の表情を窺っている。と、雨宮にはそう思えてならなかった。

「僕に見られたら、まずい事でもしてたのかな？」

「な！？ 私たちは、そんなんじゃない」

「いやあゝ分かりますか菊池さん。他の奴らには内緒ですよ」

「ちょ、貴弘、なに言って……」

「あはは、雅美、照れるなよ」

動揺する雅美の言葉を封じる為に、雨宮はいつものおちやらけたキャラクターを演じる事にした。これだけのやり取りだったが、雨宮には、どこか菊池の事を油断のならない人であると感じたからである。

菊池は俺たちが過敏に動揺したのを見て、何かしらの事情があると思ったに違いない……真面目が服を着ていると言う噂の菊池が、わざとからかう様な言葉を掛けてきのは、動揺している俺たちに力マを掛けようとしたのだ。

現に雅美など、思いつきり否定してそのままここに居る本当の理由を言いそうになったくらいだ。菊池の言葉が意識して出たものなら、人の行動を良く理解しているのか、それとも雅美の性格を把握しているのかどちらかだ。

あれだけの一瞬の間で、これだけの思考とカマを掛けて来る菊池の、頭の回転の早さは驚きに値する。

それとは別に

雨宮には気になることがあった。

どうして寮の裏手に居ただけの俺たちに、さりげなくではあったが、カマをかけて来たのか？

菊池はどうしてこの場所に来たのか……何か理由でもあるのだろうか？

雨宮の頭の中に、疑問符が浮かんだ。

「俺たちの事は秘密ですよ菊池さん。それよりも、菊池さんはどうしてこんなところへ？何か用事でもあったんですか？」

「いやなに、僕は事務とは言っても、学園の建物の管理とかもやらされているのでね、たまに校舎を一回りしては、色々見回ってるんだよ」

貴弘の質問に、菊池はよどみない答えを返すかに見えたが、一瞬、誰かの視線を感じ取ったのか、山の方へと視線を向けた。

ん？

その視線に気が付いた雨宮は、しかし、その視線の先を追わない様にした。気にはなったが、菊池の表情を窺う事に集中したのである。

「さてと……僕はお邪魔みたいだから、そろそろ退散させてもらうよ」

「そんなんじゃないんです！菊池さん誤解しないで下さい」

「なんだよ雅美、俺は本気なんだぜ」

「あんたは黙ってて！」

「あはは、うらやましいね、君たちみたいな関係は」

菊池は本当にうらやましいと言った顔で笑ったが、それはどこか、よそよそしかった。

そう、先ほど一瞬だけ視線を逸らした時から、何かしらの事に気を取られている様なのだ。

「それじゃ本当に、僕は失礼させてもらうよ……君たちも、もうそろそろ次ぎの授業が始まる頃だろうから、早々に教室に戻らないかね」

「分かりましたよ菊池さん。それじゃ行こうぜ雅美」

雨宮はこれ以上雅美が何か言い出さないうちに退散しようと思った。

何故かこの菊池にあまり事件の事を話してはいけない気がしたからである。

ところが、雅美はどうしても美智子の事が気になるのか、菊池に彼女の容態を訊ねていた。

「あの菊池さん、美智子の……」

！！

雅美が和田美智子の名前を口にすると、一瞬、菊池はポーカーフエイスのその顔に、動揺の色を見せた。

「美智子の様子はどうなんでしょうか。意識は、あの、戻ったんですか？」

「ん、ああ、朝にも話したと思うけど、彼女に外的な傷害の痕は無かったし、友田医院は信頼できる病院だ、きっと今頃には意識も戻っていると思うよ」

それだけ言っていると菊池は「それじゃ本当に用事があるから」と言つてその場を逃げるように立ち去るのであった。

どうした事だろう？何故菊池は、あの時視線を逸らしてから冷静さを失ったのだろうか……

貴弘は菊池が遠ざかるのを待ってから、菊池が視線を逸らした方向へと視線を向けた。

しかしそこには、いつもと変わらぬ鬱陶しい程の森が広がっているばかりで、菊池が動揺する程のモノは見つけられなかった。

「……ねえ」

一体そこに、何があっただろう。

「貴弘」

いや「誰」かも知れない。

「ちよつと貴弘！」

「つて、なんだよ雅美、さつきから」

「何よ貴弘、何度も呼んでるのにもっともらしい顔で考えごととしてそれにどうして菊池さんに誤解される様な事言っただのよ……」

雅美の頬が、これ以上ないと言った程に膨らんでいた。

「それから、どうして菊池さんにライターの事を黙っていたの。アレが本当に犯人のモノだったら、やっぱり学校側に知らせた方が良んじゃない？」

「ん？どうしてって……」

と、貴弘は少し考えてから。

「まあ、理由としてはいくつもあるけど、まず一つ目として、ライターを落としたのが菊池さん自身だったら？」と、逆に問い返した。「だ、だって、菊池さんは事件とは関係ないじゃない。逆に事件の事を調査してるのって、菊池さんなのよ……」

「だからって、菊池さんが犯人じゃないって保証はどこにもないだろ」

「じゃあ貴弘は、菊池さんを疑っているの？」

と、雅美は信じられないと言った顔で訊いた。

すると貴弘は、「いいや」と、平然とした顔で首を振ってみせた。「全くそんな事は思っていない」

「な、何よそれ……自分で言っておきながら、勝手に否定しないでよ」

「まあ、何となく　　つて言う部分もあるけど、せっかく俺達が見つけた手がかりだ」

貴弘はここまで言っていると、この男には珍しく真剣な顔つきになった。「それに、絶対に菊池さんが犯人じゃないとは言えないだろ」

「もう、貴弘は一体、菊池さんの事を犯人だと思ってる訳？思っていない訳？」

雅美は江戸っ子の血か、単刀直入な答えを要求する。

「可能性の問題さ。たぶん、菊池さんは犯人じゃ無いだろう。でも、菊池さんは学園側の人間であって、生徒側の人間じゃない」

「ま、また訳の分からない事言って……貴弘は何を考えてるのよ！」

雅美の頬が、膨らんだ上に紅潮してきた。

「もしも犯人が見つかった時、学園側に不利になる人物だとしたらどうなる？」

え！？

「犯人が見つかることによって、学園側にもものすごく不利になるとしたら、名門の名が高いうちの人間は、必死になって犯人を隠して闇から闇……なんて事もあり得無い」

「だって、そんな事」

「無いとは言えないぜ。俺が経営者だとしても、犯人を警察に突き出すなんて事はしないだろう。もっとも、二度とこの学園には居られないばかりか、教育者としての道も閉ざす事はするけどな」

雅美はいつもはちゃらちゃらしている雨宮の口から、予想しなかった程のキツイ言葉が出たことに息をのんだが、次ぎには、本気で怒っている表情で

「そんなの……許される事じゃない」と、憤りの言葉をはいた。

そんな雅美をみて貴弘は

「犯人を俺達が見つけるって言うのはどうだ？」と、やはり真剣な顔つきで言った。

「犯人を……私たちが？」

「そうさ、美智子を入院させた奴を捕まえるのさ」

と言って貴弘は、雅美を真っ直ぐ見つめ返す。

「美智子は俺達の友達だよな……確かに、菊池さんと協力した方が犯人を捕まえやすくなると思うが、俺達がこんな事を調べていると知ったら、学園側はそれを辞めさせるだろう」

「やっぱり学園の名誉の為？」

「そうさ、俺達がこの事件を調べるのは学園に取ってはあまり歓迎できる事じゃないからな……だけど」

と、雨宮は何かを決意した様な表情になった。

「だけど、友達としてそれは許せないだろ。美智子が犯人に対してどうするかは解らないけど、俺達は、犯人を見つけておく必要があると思う」

「貴弘……あんた本気で美智子の為に犯人を捕まえようと思ってるの？」

普段の雨宮から想像も出来ない言葉を聞いて、雅美は意外と男らしいと思った。

それに、ライターを見つけたのも貴弘の行動があったからである。学校の成績は対して変わらないけれど、案外こう言った分野では実力を発揮するタイプなのかも知れない

「ねえ、本当に私たちだけで犯人が捕まえられると思う？」

「それは解らないけど、俺達だからこそ出来る事もあると思ってる。それをやるしかないな」

「そうよね、私たちに出来る事を……」

どうしたんだろう、今までこんなに貴弘の事を頼もしく思えた事なんて無かったのに　　雅美は雨宮を前にして鼓動が高まるのを、否定する事が出来なかった。

「ね、貴弘」

と、雅美が言いかけると、今度は貴弘の質問に遮られた。

「そう言えば雅美、さっき何か言いかけたけど、あれは何だったん

だ？」

「え？」

「さつき、上を見上げたときに、何か言いかけたら？」

「ああ、あれね……」

雨宮の急な問いかけに戸惑ったが、あの時言いかけたことを思い出した。

「あの時……菊池さんが現れる前に、私は美智子の部屋をもう一度見ようとしたの、その時なんだけど、どうも美智子の部屋に人が居たように見えたのよ……でも、おかしいなと思って」

「そりゃおかしいよな。美智子の部屋は今、鍵がかかってて誰も入れないんだろ？」

「あ、おかしいって言うのはそうじゃないの」

ん？ どう言う事

貴弘は雅美の言葉に首を傾げた。

「あのね、私が人影を見たって言うのは、美智子と私の部屋の間

つまり……今は誰も使っていない空き部屋だったの」

と言って、雅美はあの時の事をハッキリと思い出した。

そう、そうなのだ、やっぱり私は、あの空き部屋の中で誰かが動くのを見た気がする。雅美は、見た直後には自分の見間違いかと思ったが、良く思い出してみれば、やっぱり見た気がしてきた。

「うん、やっぱりあの空き部屋だったわ」

と、雅美は言い切った。

「人影って……だって、今は誰も使っていない空き部屋なんだろう？」

「うん、だけど、やっぱり間違い無いわ。だってあの時」

雅美は立ち止まり、顎に手をあてながら自分の記憶をたどった。

「あの時、備え付けのカーテンが、揺れるのを見たんだもの……そう、カーテンの影に誰か居たんだわ」

「それは本当なんだな」

雨宮は、真剣な顔つきだった。

「なによ貴弘。私がこんな事で嘘を言っただって、仕方が無いじゃない」

と、雅美は念を押されて反発した。

「もしも……」

「もしも？」

「美智子の部屋に進入した犯人が、空き部屋を利用したとしたら？」

「え？」

二人の動きが一瞬凍り付いた。

「確かめに行くか？」

と、先に声を出したのは雨宮だった。

「確かめに行くって、あの空き部屋へ？」

「そうだよ、あの空き部屋に誰かが居たとしたら、そいつが犯人と言う確立が高いんだぜ」

雨宮は少し興奮した面もちで言った。

「だ、だけど、今調べに行っても、もう居ないかも知れないわよ？」
と、雅美が言った時、午後の授業の始まりを知らせる予鈴が鳴り響いた。

ちえっ

それを聞いた雨宮は、舌打ちした。

「ねえ……どうするの？」

雅美の顔に、困惑の表情が浮かぶ。

「今は無理だとしても……」 貴弘は残念と思う反面

「オレはあの空き部屋を調べてみるよ」

雨宮貴弘は、犯人を捕まえる為の大きな手がかりを得た気がした。

つづく

其の六：きっかけ

きっかけ

佐久間学園の寮は5階建ての近代的な建物であったが、エレベーターは設置されていなかった。家具などの大きな物は、屋上に設置されている小型クレーンを使って運び入れるようになっていたし、何より、生活に必要な物は備え付けになっている事が多く、クレーン自体もあまり使っていない状態だから、必要が無いと言えなくもない。

それに、エレベーターなどは定期点検などで意外と費用が掛かる。いくら寄付金などが集まりやすい私立の名門とは言え、無尽蔵にお金が使える訳ではない。

細かい事かも知れないが、それらの理由から設置しなかったのである。

五階建ての寮は、二階までは共同施設などで一緒の建物になっていたが、三階から上は、ちょうど新宿都庁の様に男女別々の棟に分かれていて、二階からそれぞれの塔に移動する。

三階は三年生の個室、四階は二年生。そして最上階の五階が一年生の部屋となっているのだが、エレベーターが無いので意外と上り下りがきつい。

そして、中の階段とは別に、建物の外には非常階段が設置されていた。頑丈な造りで、震災などに備えて各階の踊り場は十分な広さが確保されている。

その踊り場へは内側から鍵を開けて出るのだが、地震などの場合、非常扉が変形して開かなくなるケースが多いらしく、その対策として、一番端の部屋から、頑丈な庇を伝って踊り場に出られる様にな

っていた。

「しかし……」

今回の事件では、それが仇となった。

赤岡自身、寮の設計段階では非常時の事を第一に考え、庇の事や踊り場を広めに取ることに賛成していたのだが、まさかこんな事に使われるとは思っても見なかった。

もっとも、未だ真相が分かった訳ではないので、非常階段や庇が使われたとは断定出来ないのだが、菊池の話を聞く限り、それを否定することは出来なかった。

「しかし……」

赤岡は二度目のため息をついた。

菊池に事件の調査を依頼したものの、赤岡には、どうにも最初から嫌な予感がつきまとっていた。無論、このような事件が起きるだけで相当な問題なのだが、事件の真相は最悪の方向へ向かっているのではないか……赤岡はそう思えてならないのである。

事件の内容や佐久間学園の地理的状况、その他諸々の条件を加味すれば、自ずと犯人の範囲が絞られてくるのだが……どうしても内部の人間が関係していると言わざるを得なかった。

そしてそれは、生徒側の人間ではなく、恐らくは教師や職員と言った、学園側である可能性が高いのである。

自分が理事に就任してからというもの、『問題と言える問題』はついで出てこなかったのだが、ここに来て、自らの進退を決する程の『事件』が起きたのは、まさに青天の霹靂と言うほかは無い。

赤岡は革張りの椅子に、深く身を沈めてため息をついた。
すると、不意にドアをノックする音が部屋の中に響いた。

コンコン

カチャ

マスターキーを差し込むと、乾いた金属音と共に鍵が開いた。

場所は和田美智子の部屋の隣。今は誰も使用していない空き部屋の前に菊池は来ていた。

もちろん、あの事件を調べる為である。

女子棟のほぼ中央に位置する和田美智子の部屋に、決して狭くない底を伝って行くには、空き部屋である隣の部屋を利用したに違いない。

菊池はあまり勘に頼る事は無かったが、今回に関しては確信に近いモノを感じていた。

冷静になれ　と、菊池は自らに言い聞かせようとするのだが、マスターキーを差し込む時、微かに手がこわばるのが分かった。

「冷静に判断しなくては」

菊池は何度と無く自分に言い聞かせようと試みた。が、しかし、裏山へと続く道に宇賀神の姿を見てからと言うモノ、その思考はまるで意味をなさなかった。

偏見を持つて事件を調べれば、正常な判断が出来なくなる

と、心の中では分かっているものの、宇賀神の、そうあの暗く濁った様な瞳を思い出すと、菊池はどうしてもある考えに支配される。

宇賀神勇による犯行なのではないか　と言う一つの結論に。

「ふう……たかだか空き部屋を調べるだけではないか」

人は声に出して言葉を発すると幾分落ち着く事が出来ると言うが、菊池はそれを実行していた。

あの事件のあと、多少ではあるが証拠を消す為の時間はあつたはずで、犯人がもしこの部屋を使ったとしても、証拠が残っている訳ではない。

ただ……この部屋は随分と使用された事がなかったのも、もし人が使用したならば、その痕跡は分かるはずである。

今回この部屋を調べるのは、単に利用されたかされなかったかの確認だけだ　　菊池は何とか自分を納得させると、ドアノブへと手を掛けた。

冷静になれ

もう一度心の中でつぶやくと、菊池は思いきってそのドアを開けた。

瞬間！菊池の脳裏は強烈な印象によって……思考の全てを支配された。

紅い……瞳

コンコン

「菊池です。学長いらっしゃいますか？」

どうやら、ノックの主は菊池らしかった。

「入りましたえ」

何か進展でもあったのであろうか？

菊池は実に優秀な男だ。この学園で事務の全般を任せているのだが、やる事全てにそつがない。確かに、事務処理能力に秀でた者は

どこにでもいる。

ただ、菊池はそれだけの男ではなかった。若いのに、感心するほど細かい部分へと気が回る男なのだ。

例えば、生徒達の中には各界の有力者を親に持つ者がいるのだが、慶弔事があればそつなく挨拶状などの手配を行うし、私自身が出席しなければならぬ程ならば、式場への経路まで調べてくる。

今回の事にしてもそうだった。

和田美智子の入院先や家族への連絡など、その対応の全てに気が利いていて、任せていて安心感がある。

少々事務の領域を越えてはいるが、今では秘書の様な位置づけで考えている程だった。

カチリッ

ドアが微かな金属音を立てて開くと、そこには『いつもの』菊池の顔があった。

「学長、二日後の出張先への交通手段と、必要な書類を用意しました」

「二日後の……」

「学長お忘れですか？ 月島泰三氏の米寿を祝うとおっしゃっていただけです。出発は明日の夕刻となります」

そうだ……菊池の言う通り、この学園の卒業生であり、多額の寄付金を寄せているのが月島で、この寮を建設する際にも、彼の寄付金なしでは考えられなかっただろう。その月島が、近々米寿を迎えるのだが、学園の代表としてどのような事があるうとも出席しなくてはならなかった。

どうやら、自分でも気が付かない内に相当和田美智子の事件に気を取られていたらしい。もう少し、他の事にも気を配らなければ足をすくわれかねないな……すっかりしなければ。

それにしても、菊池は事件の調査をしていると言うのに、当の本人が忘れかけていた事を良く覚えていたモノだ。書類を集めたり、交通手段を調べるだけでも時間が掛かるだろう。有能と言う言葉は、彼の為にあるのかも知れない。

「失礼……あんな事があつた後で少々気が取られていたらしい。君に言われるまで失念していたよ」

赤岡は自らの間違いを誤魔化そうとはしなかった。

普段から自らに言い聞かせている事だが、「公明にして正大であれ」と言う言葉を大切にしている。

名門と呼ばれる学園の理事兼学園長と言う立場になれば、きれいな事ばかりではその立場を維持できるモノではないのだが、赤岡はそれを実行し続けながら現在の地位を築いてきた。

学園長と理事の地位を保つには、以外と敵は多い。その中で、他人に弱みや隙を見せる事は地位を追われる事を意味する。

そんな世界の中で、赤岡のこれまでの行いは、他者につけ込まれるだけの後ろ暗い事は無かった。

「公明にして正大であれ」

この事が、今の赤岡に取っては身を助ける一番の武器となっていたのである。そして、この正直な言葉が、小さな波紋を呼ぶ事になるうとは、彼自身考えてもみなかった。

「あんな……事？」

菊池は、全くその言葉の意味が分からないと言う様な顔をしたのである。

「そうだ、事の重大さは君も充分承知しているハズだが？」

一体どうしたと言うのだろう　　菊池が和田美智子君の事件に付いて、全く認識していないと言った表情を浮かべたのだ。

現に、その辺の認識が一番ある菊池だからこそ、事件の調査を任

せたのだが……その菊池が、真っ先に思い浮かべるであろう事を一瞬の事とは言え、忘れるなどとはとうてい思えなかった。

赤岡は、注意深く菊池の表情を窺った。

「ああ、和田美智子君の事故の件ですね……」
事故？

確かに当面の間、対外上の事を考えると、事件ではなく『事故』として扱った方がいいだろう。

しかし今、菊池が取った態度にはどこか不自然さが感じ取れた。

「ああ、和田君の『件』だよ」

しかし赤岡は、その疑問や『事件と事故』に拘る素振りは全く見せなかった。学園長として、また理事として、ライバルとの戦いを勝ち抜いてきた赤岡のポーカーフェイスは相当のモノだ。

先ほどの受け答えの際も、まず菊池にさとられる様な失態はおかしていないはずである。

……

どうして私は、菊池に対してこの様に警戒をするのだろうか

赤岡は奇妙な感覚に陥りかけていた。

本来菊池は、赤岡に取って信頼の置ける有能な部下である。

和田美智子の件に関しても、その能力と信頼における人柄と思えばこそ、調査を菊池に一任したのだ。

それがまるで 私は彼を疑っているかの様ではないか。

赤岡は、菊池の異変に気がついたことを、彼自身に気がつかせてはいけないと言う、何かしらの予感めいたものを感じていたのである。

ばかばかしい 赤岡はそれを、要らぬ気苦労とうち捨てようとした……が

とにかく少し様子を見た方が良い。赤岡はその予感めいた感情を、完全に捨て去る事はできなかった。

「それで、何かしらの進展はあったのかね」

赤岡は、渡された資料に目を通しながら、菊池の言動を注意深く窺うことにした。

「和田美智子君の事故は」

「うむ」

「彼女の受験に対するノイローゼが原因です」

！！

「……それは、確証のもてる事実なのかね？」

「はい、まず間違いは無いかと思われます」

「ふむ……だがしかし、彼女の成績ならば受験を気にする程では無いと思えるがね。確か和田君の成績は、学年でもかなり上位に位置すると記憶しているが」

それに、金銭的に困る様な事もあるまい。彼女の実家と言えば、資産家として財界でもかなりの家だ。

となれば、考えられる事は学力の方だが、それについても、常に学年上位の成績をとり続けている彼女に、その心配は低いと思われる。

それに、彼女はまだ一年生である。受験に対するプレッシャーが一番少ない時代だ。

それがどうしてノイローゼとなって、そして、あの様な騒ぎを起こしたのか……菊池の説明を、聞かねばなるまい。

「菊池君の調査では、和田君の件は受験によるノイローゼと言う事だが、それはどういう事なのかね。何か確証足り得るモノがあるのだろうか？」

「はい、私が今回調査を開始したところ、クラスの中で何名かの生徒から彼女が今から受験に対する不安を持っていたとの証言がありました」

「国府田雅美君からは、その様な話しは聞けなかったはずだが？」

「和田美智子君としては、一番の親友であればこそ、その関係の中で受験の話を持ち出さなかったでしょう。彼女との間だけでも、受験とは無縁の世界を保っていたのかと思われます」

赤岡の問いかけに、菊池からは淀みない回答が帰ってきた。

.....

「しかし、ノイローゼと言うことだが、あの夜、和田君の起こした騒ぎは、相当のモノだったと聞く。それこそ、薬物でも使用していたのではないかと言う程の。その事に関しても、何か分かった事が？」

「実は、彼女の部屋のトイレから、この様なモノが」

そう言うつと菊池は、小さいビニール袋に入った、深緑がくすんだ様な色の紙粘土の様な固まりを取り出した

「これは？」

「多分、大麻の一種だと思います」

.....

赤岡は覚悟していたとは言え、その事実には驚きを隠せなかった。

そう　　どうして菊池はこれ程重要な出来事を、一瞬なりとも忘れていた様な顔をしたのか？

出張の件も、重要な話であることには代わりない。代わりがない

のだが、これ程の事実を知りながら、どうしてあの時、一瞬の間が出来たのか。

そして、その一瞬の後、まるで『スイッチ』が切り替わったかのように、『用意されていた答え』をしゃべり出したのか……

それに矛盾と言えば、大麻と言えば、麻薬の中でもダウン系と呼ばれ、幻覚などを見る事があっても、大騒ぎするモノとは別物だと聞く。

……

「菊池君、今までの事をレポートとしてまとめられるね」

「はい、ある程度はすでに作成してあります」

「私は明日の夕刻から出発し、明後日の米寿の会に出席して、ここに戻るのにはさらにその翌日、時間はスケジュール通りだと昼前になるのか……その三日間で、報告書として提出してもらいたい」

「承知いたしました」

「それから」

「はい、他言無用と言う事で」

「うむ、そのへんの処理は、君に任せておけば心配は要らないだろう。薬物と和田君の保護者への報告は、私の方から行うのでそれまでは報告を控えるように」

「はい、心得ております。それでは、学長がお帰りになる三日後の正午までに、報告書の方は作成しておきます。私はこれで、失礼させていただきます」

「ああ、頼むよ。私は君を信頼している」

「ありがとうございます。それでは失礼させていただきます」

菊池が静かに部屋を去って行った。

ふう〜

赤岡は、肺の中の空気を、全て吐き出すかのように深いため息をつくと、しばらく目を瞑り、なにやら思案したのちに一本の電話を掛けはじめた。

呼び出し音が数回響いた後、プツツ　　と言う小さな音と共に相手がでた。

「しばらくぶりです、赤岡ですが……上社の万笙^{ばんしょう}先生にお伝え願いたい。二日後の夜、どうしてもお会いしていただきたいと。ええ、ええ、連絡は、私の携帯電話の方へ直接。ええ、なにぶん、重要な出来事が起きた……と、お伝えしていただきたい」

赤岡は、何時にない程の真剣な顔つきで電話を切ると、もう一度、深いため息をつくのだった。

つづく

其の七：翁

翁

街にはいくつかの神社があつたが、その神社は比較的街の外れ、小高い山の麓にあつた。

石畳の参道には桜の木々が植えられ、春先になると、その華やかな桜の花びらと相まって美しく映える。

参道を程良く歩くと、古ぼけてはいるが清涼感のある石造りの鳥居が見えて来る。そして、その鳥居をくぐると正面に社殿が顕れる。社殿は正面手前に拝殿があり、その奥に本殿がある一般的な造りをしていて、正面から左手に神楽殿が併設されていた。

神楽殿とは文字通り奉納神楽舞などを行う為の舞台であるのだが、この神社でも、年に数度神楽舞が行われている。

赤岡は一度だけ、その神楽舞を観たことがある。

あれはもう何年も前の事、そう、四・五年も前の頃だろうか、舞手は十二・三の美しい少女だった。

赤岡には神楽舞の知識は無かつたのだが、今思い返しても、その少女の舞はすばらしかったと思う。

舞は巫女装束で行われていたのだが、静から動へ、また、動から静への動きはもちろんの事、少女自身の美しさが、神楽舞に華やかさと、そして神聖さを加えていたのである。

あの時、あの場に居合わせた者が、すべからく舞に惹きつけられた事は疑いようが無い。

「ここに来るのも、あの神楽舞以来になるのか……」

赤岡は社殿の右手に位置する社務所に向かって歩き出した。

五月のはじめ、昼を過ぎてそろそろ四時にさしかかるつかという時間、社務所に人が詰めている様子は見うけられなかった。

あまり規模の大きい神社では、常時社務所に人が詰めている方が珍しい。よって赤岡は、社務所の裏側にある神主の家へと直接訪ねる事になる。

赤岡が用のあるのは、別にこの神主では無いのだが、上社へ向かう場合には、一応下社の神主へ顔を出す事が決まりとなっているからである。

実は地元の間人でも、この神社に上社と下社があることを知る者はあまりいない。そして、上社へ上がる場合に、下社へ声を掛ける事を知る人間は、それこそ限られた人間のみしかない。

電話で連絡は入れているものの、その決まりを破ることは、赤岡には到底考えられなかった。

と言うよりも、そうしなければならぬ理由が存在したのである。

その理由とは、信じる信じないは個人の自由だが、上社へ向かう道は、通常の者が見つけられぬ様になつていたのであった。

結果　　と言う言葉は、赤岡もその目にするまでは物語や幻想小説の中だけのモノばかりと思つていたので、一度でもそれを体験すると、否定する方が難しい。

社務所の横を通り過ぎ神主の家が見えてくると、そこには、下社の神主が赤岡を迎えてくれた。

「どうも、お久しぶりです」

赤岡は、過去に何度か上社に用が出来たことがあり、目の前の神主にもその都度あつていたので、今回も、道案内としての役目を果たして貰う事となつた。

「万筭先生には連絡を入れておきました。どうぞ、こちらです」
その神主は自らの役目を良くわきまえているのか、多くを語らず、

赤岡の挨拶に軽く返辞を返した後、先に立って入り口までの案内にたった。

赤岡はゆつくりと、その後を追う。

下社の神主は社務所の裏を通り、拝殿を横目に本殿の裏側に回ると、何ら周囲の様子と変わらぬ、雑木林の前で立ち止まった。

このまま雑木林を抜けても裏山に登れそうだと、いつ見ても錯覚するのだが、何度試しても、どこをどの様に歩いても、すべからく同じ場所へと舞い戻ってしまう。

はじめ、道に迷うのは単純に自分の方向感覚が狂っているものとはばかり思っていたのだが、それが結界によるものだと言われた時、赤岡は妙に納得したことを覚えている。

しかし、これから会いに行く人物ならばそれもうがえない。
「それでは、これをお持ち下さい」

下社の神主から、一枚のお札のようなモノが手渡された。

長方形で短冊の様な形のそれには、なにやら文様らしきモノが描かれていたが、結界を通る際に必要となるらしい。

赤岡はそれを、内ポケットの中へ大切にしのばせた。

私はこれで それを見届けた下社の神主は、一言そう告げると、元の方へと去ってゆく。

さて それを見届けた後、赤岡はゆつくりと上社への道を、歩みはじめるのだった。

一見獣道の様な、細く幾度も曲がりくねった道をしばらく行くと、下社と同じように、石畳の階段があらわれた。

記憶では、この先百メートルほど続くのだが、その全てが上り坂なので少々厳しい道のりとなる。

赤岡は石の階段へと足をかけた。

石畳は相当の年月が経っているのか、所々の角が丸くなっていた

り、雨だれの為か、小さなくばみが出来ていて歴史を感じさせる。階段はゆつくりと右にカーブして、上へ上へと続いていた。

上社の社殿は、街の方角からは深い木々に覆われていて、この時点では姿を確認することが出来ないのだが、道も中程を過ぎ、やがて終盤へと差し掛かると、そこに、下社よりもやや小さめながらも凜とした雰囲気を持った建物が見えてくる。

ふう　と、赤岡はその姿を見ると、呼吸を整える様に息を吐いた。

榊神社、これが赤岡の目指していた場所である。

やがて石の階段も終わり、正面に木造の鳥居を目にすると、そこには一人の好々爺然とした翁が赤岡を待ち受けていた。

「よう来なさった」

「万笙先生、お久しぶりです」

「うむ、もう四・五年になるのかのう、立ち話も無かるう、中に茶を用意しておるで、一息つくが良い」

赤岡に先生と呼ばれた翁はそう言つと、促すように、社殿の脇にある自宅の方へと歩きだした。

「一息つけたかな」

その翁は、赤岡が上り坂で呼吸を乱すのを知っていたのか、氷を浮かせた冷たいお茶を用意していた。

「お気遣い、ありがとうございます」

赤岡は冷たいお茶の礼を言つと、姿勢を正した。

「さて、お互い昔話を語るほど、時間がある訳じゃないでな」

「はい、それでは今日ここに伺った理由を、お聞き下さい」

赤岡は今まで学園で起きた出来事を、順序よくまとめて万笙へと

語った。

和田美智子が突然騒ぎを起こして意識を失い、近くの病院へと収容されたこと。そしてその事件を調査した事。その調査をした菊池という青年の事。さらには、調査報告をした菊池の違和感など、赤岡は自らの感じた事も含めて詳細に語った。

特に、調査報告をした菊池の様子と、和田美智子が未だ目覚めない事に関しては、説明にも力が入った。

赤岡は今朝方病院の方へ連絡を入れていたのだが、和田美智子が未だ目を覚ます様子を見せないと言う報告を受けていた。

「ふむ……それで？聞く限りでは、多少気に掛かる部分もあるが、わざわざここに足を運ぶ様なわけでもあるのかのう」

「はい、私も通常であれば、和田美智子君の事件をノイローゼと言う形で発表出来ればそれに越したことはありません……しかし2点ほど、先生も気に掛かるとおっしゃった部分だと思いますが、どうしても見逃すことが出来ない部分があります」

「菊池と言う青年の事と、和田と言う娘が目覚めないと言う事かね」
「そうです、菊池と言う青年は、先ほども説明したとおり優秀な人間です。その彼がどうしてあの様な結果を報告したのか……それもいつもと変わらぬ目をして」

「君は菊池と言う青年に、何を見たのだね？」

「そうなのだ……私は菊池が『普段と全く変わらない状態で』あの様な無理のある報告をしたことが、どうしても納得がいかないのだ。赤岡はその事を、どうしても見逃す事ができなかった。

「通常、催眠術などに掛けられたとして、深層に眠る意識のせいか、どこかその挙動に不自然さが残るはずです……それが、菊池君には見られませんでした」

「催眠術では無いと？」

「ええ……彼の目は全く正常の者と変わりませんでした。それが一番恐ろしいのです」

「そうなのだ、彼は自らの発言に『違和感』を感じずに、まるでそ

れが『真実』であるかのように語ったのだ。

「より深く、心の奥深くまでに入り込み、人の心をコントロールする……そしてそれを、全く本人が認知していないし疑問に思う事もない」

「そこに、何らかの呪術の力が働いている……と？」

「分かりません。しかし私には、菊池が何者かに催眠術とは違った方法で操られているとしか考えられないのです」

赤岡も、目の前にいる翁、万笙との出会いがなければこの様な考えは浮かばなかったはずである。現代において、科学の恩恵を受けながら生きている人間に取って、呪術だのと言う非科学的な発想など浮かびようが無い。

しかし、非科学的な世界もこの世には存在するのだ。赤岡は知っていた。

退魔士と呼ばれる存在がいる 最初赤岡は、その存在を知識としては知ってはいた。それこそ、小説や物語の中でいくらでもそれを確認できるからである。

その代表的な例と言えば、平安の世に名をはせた陰陽道の安倍清明があまりにも有名だろう。真実こそは分からないが、それこそ歴史に名を残し、多くの物語として語られ、現代においてもその人気が衰える事がないのだから。

とはいえ赤岡は、その様な存在を全く信じる事が出来なかった。人の身で有りながら妖魔と戦い、呪を操り、非現実的な出来事を当然の様に言う存在など受け入れ様が無い。

ともすれば、今でも受け入れたくない気持ちの方が大きい。

がしかし、目の前で繰り広げられた出来事を否定出来るほど、赤岡は割り切れては居ない。

そう　赤岡は、目の前で戦う万笙の姿を見てから、受け入れざるを得なくなったのだった。

「ふむ、では今回うちに来た理由は、その和田美智子という少女を昏睡状態に陥らせ、菊池と言う青年に呪を掛けた者。それを排除して欲しいと言うのかな？」

翁は赤岡の全てを射抜くかのような鋭い視線を向けて問いかけた。この好々爺の、どこにこれ程の激しさが眠っているのか、疑問に思ふ程の鋭さだった。

赤岡は一瞬身のすくむ思いがしたが、自らの使命を思えば、この視線にも耐えられる。

「どうか、万笙先生のお力をお貸しいただきたい」

赤岡は翁の視線をまっすぐに見つめ返し、深く頭を下げるのだった。

そんな赤岡の姿を見て翁は、しばらくの間目を閉じて沈黙した後、元の好々爺に戻って静かに告げた。

「よろしい、今回の事は引き受けましょう」

「あ、ありがとうございます。万笙先生のお力があれば、事件は必ずや明白となるでしょう」

赤岡は胸のつかえがスツ　と、おりた気がした。

なぜならば、この目の前に居る好々爺こそ、日本の裏社会に知らぬ者なしとさえ言われた、一代の退魔士であるからである。

「じゃが、今回の件を調べるにあたり、一つ、条件がある」

「は、はあ、私に出来る範囲であれば出来る限り」

「なに、金銭的なモノではないのだが……それと、先に言わせてもらうが今回の件でわしが動くことはないぞ」

え？

「先生それは……」

「まあ待ちなさい。今回の件を軽く見た訳けでも、わし自身が面倒と思つての事でも無いのだが、事件の調査と処理には、わしが一番

信賴する者に任せると言う事じゃよ」

「は、はあ」

「なに、学園という場所にわしの様な者が乗り込めば敵にも知れるし、その者どもが身を隠すかもしれんしのお……今回の件には、一番適任な者があるのじゃよ」

「それは、そうかも知れませんが……それで、その一番適任と言う方は今どちらに」

「ふむ、それでは呼んでくるかの」

そう言うつと翁は、次の間に居た翁の伴侶へ、その者をここへ呼ぶ様にと告げてまた同じ場所へと座り直した。

「そのお方はこちらにお住いなのですか？」

「おお、住んでおるとも……住んでおるから少々心配でのお」

それはどの様な　と、赤岡が理由を問おうとしたとき、ふすまの向こう側から、涼やかな女性の声が聞こえてきた。

「お祖父様、お呼びでしょうか？」

「おお乃亞か、こちらへおいで」

お祖父様……に、乃亞？

赤岡はその人物が、どういった者なのか興味をそそられた。

乃亞と言う名前からすると女性の様だが……そして万笙の事をお祖父様と呼ぶからには、翁の孫と言う事だろうか？

「失礼いたします」

女性の声が静かに告げると、ふすまが静かに開かれた。

最初は少しだけ、そしてしなやかな女性の指先がふすまにかかる、人一人分のスペースがあげられ、その女性は正座したままその身を滑らせて来た。

一連の動作には全くと云って隙が無く、優雅ささえ感じられる。予め来客を知らされていたのか、その女性は赤岡の方へ向き直ると、深々と頭を下げて挨拶をしてきた。

「はじめまして、榊乃亞ともうします」
神楽舞の 赤岡はその女性を見た瞬間に、あの時観た神楽舞の『少女』の姿を思い返していた。

そう、この少女こそ、榊万笙の孫娘であり数年前に赤岡が見た神楽舞の舞手である、榊乃亞^{さかきのあ}だった。

「さて乃亞よ、わしから一つ、頼み事があるのじゃが」
翁はそう言つと、孫娘である少女へと向き直つた。

「ここに居るのはわしの古くからの友人の倅でな、今は佐久間学園と言つ高校の理事兼学園長をしておる。もちろん、ココに居ると言う事は相当の理由が合つての事と分かつておると思うが、一つ、乃亞に協力して貰いたい事が出来た」

「お祖父様、それは……」

「うむ、退魔士としての仕事なのじゃが、乃亞よ、明日から佐久間学園に入学して、ある事件の調査をしてくれんか」

え？

その驚きは、乃亞と赤岡の同時のモノであつた。

「赤岡君、この乃亞ならば学園の中でも怪しまれまい」

「え、あ、ですが……」

「なに、実力の方は心配ない。わしのお墨付きじゃて」

「は、はあ」

「お、お祖父様、私は」

翁は、乃亞の言葉を優しく遮つた。

「なあ乃亞よ、お前は何時までもここに居るべきじゃない。過去に拘る気持ちばかりでは何も得る事はない」

「今回の事は、お前に取っても良い機会じゃ」

……

少女の表情には、苦悶やとまどい、それから不安や逡巡と言った様々なモノが入り交じって居た。

赤岡には、この二人の間に何があつたのか推察しようも無い。無いのだが、この乃亞と呼ばれる少女に、何かしらの過去がある事だけは察する事が出来た。

そしてそれは、少女をこの屋敷に縛り付け、外の世界へとつなげる事を拒否させる程の深刻なモノであるに違いない。

翁はそんな少女に対し、慈しむような優しい瞳で語りかけた。

「乃亞よ、まずは一歩だ……少しずつで良い、少しずつで良いから、お前には歩き続けて欲しいのじゃよ。綾乃の為にも」

少女は、綾乃と言う言葉に一瞬の逡巡の情を見せた。過去の事と何らかの絡みでもあるのか、それは赤岡にも判らない。

場に、しばらくの静寂が訪れた。

この場から一歩、外の世界へと足を踏み出すか出さないか、その葛藤が少女の中で渦巻いている、そんな静寂の間であつた。

そんな静寂を作り出したのもこの目の前にいる少女なら、それをうち破つたのもまた、少女だつた。

少女は静かにその瞳を閉じたのち、

「分かり……ました」

と、何かを決意した表情でまっすぐな瞳を翁に向けるのだつた

う
う
う
う

其の八：敵

敵

「で、これからどうするの？」

午後の授業が全て終わり、教室に残る人影もまばらになった頃、雅美と雨宮は今後の方針を立てるべく話し合いをしていた。

「やりたい事はいくつかあるけど、出来る事には限りがあるからな……」

「何よその、やりたい事と出来る事って？」

「ん？あーなんて説明したらいいのか、まあ、現状いくつかのやりたい事があるとして、その中で、俺たちに出来る事って限られているんだよ」

「むうゝで貴弘、そのやりたい事ってなんなのよ」

雅美は我慢できないと言った風だった。

「はあゝ、雅美って本当に江戸っ子だよな」

「な、な、何よその憐れみの籠もった目は……！」

「いやなに、俺の率直な意見をだな……って、ぐうで握り拳を作るな、ぐうで」

雨宮は一つため息をつく、気を取り戻して話を続けた。

「別に江戸っ子が悪いってわけじゃなくて……まあ、その話はおいとくとして、一番最初にやりたい事って言うのはさ、お前と美智子の間の部屋。あそこを調査したいんだけど、こんな時間じゃおいそれと俺が女子棟に行ける分けないだろ。これがやりたいけど出来ない事」

「まあ、この時間じゃ絶対に見つかるからね……」

「それに、部屋の鍵もどうにかしなくちゃならない」

「そうよね、部屋の鍵が無くちゃ結局開けられないわけだし」

「ま、鍵の方は何とかなるとしてもだ」

「何とかって……あんた、まさかして開けられるって言うの?」

「まあ、最後の最後には、キーピングって手もあるけど、マスターキーを手に入れる方が現実的かな」

「キーピングって……貴弘、あんたさりげなくともない事言ってない? 私、あんたが犯人なんじゃないかって思えてきたんだけど」

ぶっ

「じよ、冗談はよせよな。俺がそんな事をする分けないだろ」

「どうだか……そう言えば最近、お気に入りブラ、一枚見つからないのよね」

「くっ、さっきの仕返しかな?」

「さあ、何の事だか。で、本当にこれからどうするのよ……貴弘」

雅美は今までの軽口とは違い、真剣な顔つきになった。

「ああ、まず俺たちがやらなくてはならないのは、美智子の容態を聞く事。あいつが目を覚ましたんなら、酷な話だが、何か聞き出せるかも知れないし、それに、俺たちが犯人を捜し出して良いのかも、美智子に確認をしておかなくてはならないし」

「そうね……もう一日経とうとしてるんだし、美智子も目を覚ましている頃よね。じゃ、今からすぐにも?」

「そうだな、それも良いかも知れない」

「?」

「何だ雅美」

「それも良いかも知れないって、他にもやれる事があるの?」

「いや、この場合美智子の病院に行くのが一番だ。とりあえず、部屋に荷物を置いてから直ぐにでも行こう。病院はそれ程遠くないとしても、ここを一端おりてから、また戻ってこなくてはならない訳だし」

「うっ、そうか、この時間だと麓までは徒歩だし、帰りはタクシー

でも拾わなくちゃ交通手段がない」

「ま、タクシー代については心配するな。それよりも、ここは早く行こう」

「むっ、ちょっと引つかかるけれど、背に腹は代えられない……か。一端部屋に戻ってから、正門の前で落ち合いましょ」

「正門はよそう」

「どうして？」

「いや、学校側が、美智子の病院に見舞いに行く事を良くは思わないだろう。裏から抜けて麓までよう。今からならバスも残ってる」

「……ね、貴弘って、こういう状況になれてるでしょ？」

「なんだそれ。俺は別に」

「……」

「それより、行くぞ雅美」

「ま、いつか」

雅美は江戸っ子らしく、拘る事をしなかった。

「さてと赤岡君、乃亞を学園に向かわせるとして、君にやっておいで貰いたい事が二つ程ある」

「？」

「いやなに、それ程難しい事ではない。一つは和田美智子君の面会許可を取っておいて貰いたい。どうせ、面会は禁じられているのじやろう」

「はあ……確かに、関係者以外面会謝絶になって居ますが、未だ目を覚まさない彼女になにか？」

赤岡のその問いに翁は、笑うだけで答えなかった。

「それで万笙先生、二つ目は」

「それがもう一つの事。乃亞には、明日にでも学園に向かわせよう」

「明日……ですか？」

「うむ、乃亞には明日向かわせる。それでだ、赤岡君にはその手続きを行って貰いたい」

「はあ、そちらの方も何とかなると思いますが……その、乃亞君の準備は大丈夫なんでしょうか？」

「その辺は大丈夫だが、その時、乃亞には和田美智子君と、それから国府田雅美君と言ったかな、彼女達の間空き部屋を充てて貰いたい」

「あの空き部屋を、ですか？」

「うむ、何はともあれ倒れた本人を観る事と、何より、その部屋を調べるにはこれが一番良いと思うので」

「……分かりました。入学の手続きと、部屋を和田美智子君の隣空き部屋にすれば良いですね」

「別の場所に部屋が空いておつて、どうしてもそちらに変わると言うのならそれも仕方がないが、その場合、空き部屋の鍵を乃亞に渡して貰いたい」

「いえ、部屋の方も何とかなるでしょう」

「ならば問題はない。乃亞には明日、直接病院へ寄ってから学園へ向かわせるとしよう……」

「分かりました。それでは、私は直ぐにでもここを立ち、手配を済ませておきます」

そう言う赤岡は、厚くお礼を述べた後、早速上社を後にした。

「さて乃亞よ……聞いておつたかな」

「はい、お祖父様」

返辞と共に、隣のふすまが静かに開かれた。

「これは退魔士としての仕事になるが、乃亞よ、お前には生徒として学園に行つて貰う」

「お祖父様、お祖父様なら別にこの様な事をなさらずとも……」

「乃亞よ……学園と言う隔離された場所に、わしの様な者が行けば、敵に気付かれると言うのは嘘ではない。被害を最小限にとどめるに

は、わしよりも、お前さんに任せた方が良い。これは退魔士としての判断じゃて」

「……お祖父様がそう言われるのならば」

「さて、乃亞にも準備があるだろう。必要なモノがあれば後で送るとして、まずは病院に行つて、和田美智子なる娘を看てやるが良い」
「分かりました」

「後の事は、お前さんに任せよう」

……

裏庭で待ち合わせた二人は、共に、無言に成らざるを得なかった。

「聞いた……貴弘」

「そつちもか」

「じゃ、やつぱり」

……

「あんなのは噂話だ」

「そんなの当たり前じゃない！美智子が薬をやるなんて、そんな訳ない」

「当然だ、美智子がそんな事するわけ無いだろ」

……

「誰が、あんな噂を」

雅美と貴弘が寮に帰ると、そのうわさ話で持ちきりだった。

和田美智子は、やっぱり薬をやっていた。

美智子の部屋から薬が発見されたんですって。

そつじや無いかと思つてたんだ。

無責任な噂は、既に既成事実として広がっていたのである。

「行くぞ雅美」

「貴弘」

「今は、それを詮索する時じゃない」

「だけど……」

「俺だつて気に掛かるさ、今回の噂話は前と違って具体的だ。それに、噂が広まる速度が尋常じゃない」

「じゃ、誰かが意図的に流した？」

「そう考えるのが妥当だな」

「一体誰が？」

「それを探し当てるのは無理だ。噂話の出所なんて、どうやったってたどり着ける訳がない」

「でも」

「さつきも言っただろ、それを詮索するのは今じゃない」

……

「それよりも、美智子の病院へ急ぐぞ」

「雨宮貴弘の横顔には、殺気が籠もっていた。」

「貴弘？」

「今回の事で分かった事がある」

「それは？」

「敵がいる」

敵

雅美は貴弘の言葉に身震いした。

何者かは分からないが、少なからず美智子を襲った『犯人』がいた事は分かっていて、
が。

隣に居る男は、『犯人』ではなく『敵』と言う言葉を使った。
最初から悪意があった事は確かだろう……しかし、噂話を広めた

事で、『犯人』から『敵』へと変わったのだ。

これで身震いしない方がおかしい。

敵は、倒すモノである

今までは犯人を突き止めるだけだと思いこんでいた。

それが敵となり、倒すモノとなれば、戦わなくてはならない。

犯人を見つけたすだけではない、それをうち破らなくてはならないのだ。

実際に殴り合いだのをする訳ではないのだろうが、この意識の切り替えは、雅美にとって劇的な変化だった。

「貴弘、私に出来る事……ある？」

「おう、雅美には、雅美にしか出来ない事が必ずあるさ」

「そ……なら私も、戦わなくちゃね」

そして、勝たなくちゃね、美智子

雨宮貴弘と国府田雅美は、無言のまま、和田美智子の病院へと向かった。

和田美智子が入院している友田総合病院は、駅から歩いて10分程度の場所にあった。

ほぼ全ての診療が出来る友田総合病院は、街にある病院の中では群を抜いた規模の大きさだった。そして、友田の名前を冠しているとおりに、経営しているのは友田と言う男だった。

この男は、和田美智子の父親である和田道広をはじめ、各界にも色々と顔の利く男で、そのパイプを利用する代わりに、多少の問題事も面倒をみていた。

菊池が和田美智子をこの病院に入院させたのも、その点にあるのだが、友田は今回の事では頭を痛めていた。

友田は当初、和田美智子は何者かに襲われて、そのショックで意識を失っただけと軽く考えていた。血液検査の結果を見ても、何らかの薬物を投与された形跡も診られなかったし、襲われたとはいえ、身体に外傷らしきモノも見つけられなかったからだ。

ところがである、いくらショックを受けて意識を失ったとはいえ、事故からまるまる一日が過ぎた今に至っても、和田美智子が意識を回復する様子が見られなかったのである。

確かに、精神的なショックなどで何日も意識を回復しない者もいるのだが、今回の患者は財界でもかなり実力があり、また、個人的にも付き合いのある和田道広の娘、和田美智子である。

別に、友田総合病院に非があつた訳ではない。

倒れた場所は佐久間学園の寮の中であつたし、運ばれてきてからの処置や検査にも手落ちはなかった。

しかし、ここまで意識を回復しないのは些か問題だった。

友田は和田道広に対して、『心配は要りません、意識もじきに回復するでしょう……』と、答え、一通りの検査以外の精密検査を行わなかったのである。

外傷は見あたらなかったとは言え、精密検査を行えば、何か違った原因が見つけられたかも知れない。

和田道広から、その点を問いただされたならば友田としては立場が無い。

それにしても、和田美智子が意識を回復しない原因は、一体何があつたと言うのだろうか……

友田は院長室の深い椅子に腰を掛けながら頭を悩ませた。

今からでも 友田は精密検査を行なおうと思つた。

明日にも、和田道広が病院に到着する。その前に、尤もらしい答

えを出す為にも、和田美智子の精密検査を執り行なっておいた方がキズは浅くて済む。

友田が、和田美智子の精密検査を決めたとき、ドアをノックする音が聞こえてきた。

コンコン

院長先生、例の患者さんに面会の方が訪れていますが……

声の主は、友田が気を許す看護師の一人だった。

少々問題のある患者や、病院内でも秘密裏にしておきたい事などを任せるため、多少鼻薬を効かせている看護師の一人で、例の患者とは、もちろん和田美智子の事をさしている。

学園の関係者ならば和田美智子が未だ目を覚ましていない事を知っているのだから、直接自分の所に来るはず……それを本人に面会したいと言う事は、大方学園の同級生が何かだろう。

「お見舞いならば、事前に話している通りに帰って貰いなさい」

和田美智子の意識が戻らない今、別に病室に入れるくらいは問題ないのだが、学園の生徒なら、帰った後に彼女の様子を語るだろう。変な噂でも流されて、彼女が学園に復帰する際、居づらくなる事はなんとしても避けたい。

友田は最初からそう考えて、学園の生徒などのお見舞いは全て遠ざけていた。

「あの、それが……」

その事を知っている筈の看護師が、まだ何か言いよんどんでいた。

「何かあったのかね。とにかく入りましたまえ」

「はい……失礼します」

その看護師は、院長室へと入ると少し緊張した面もちだった。

「どうしたのだね？」

友田は看護師に尋ねた。

「はあ、あの、学園の生徒だか分かりませんが、この様なモノを携えてきまして、面会させて下さいと、言ってきています」

「これは？」

友田は、看護師から一枚の手紙を受け取った。

「和田大造氏が特別に会わせるように？」

「なんだと言うのだ一体？」

「はい、それでどうしたモノかと院長先生に取り次いだのですが」

「しかし……」

「あの、和田氏に電話で確認されてみては？」

「そんな事は分かっとる！」

友田は知らず、声を荒げていた。

「いや、すまん。そうだな、とにかく確認してみよう。その……」

「はい、女性の方です。まだ15・6の高校生の様ですが」

「そうだな、その娘には、応接室で待たせておいてくれないか」

「分かりました」

看護師は、これ以上友田の機嫌を損ねたくないのか、早々に部屋を後にした。

「君が和田美智子君に面会したいと言う娘かね」

「はい」

友田は、看護師が去った後、早速和田大造へ連絡を入れていた。

「和田氏に確認を取ったが……しかし、未だ美智子君は目を覚ましていない状態だね、病室に入ったとしても会話などは出来ないのだが」

「それで結構です。それに、先生にご迷惑をおかけする事はいたしません」

「いや、別に迷惑がかかると言う事はないのだが……」

言葉とは裏腹に、友田は目の前の娘に警戒心を抱いていた。

「今はショックから目を覚まさないだけで、彼女には別に危険は無いのだが、少しデリケートな状態である事は事実なのでね」

「ええ、先生の危惧も充分承知いたしております。彼女に、特別何をすると云う訳ではないのでご安心下さい」

……

正直な事を言えば、和田美智子が意識を回復するまで、外部の者と面会させる気はさらさら無かった。当初の考えと違い、あまりにも美智子の意識が戻らない状態が続き、状況が把握できない時点でこれ以上何らかの失点はなんとしても避けたいと思っていた。

とはいえ、和田大造との話では、目の前の少女を会わせない訳にはいかない。

「ですが、未だ目を覚まさない状態で、娘さんに会わせるのはどうかと……」

「それでも構わん。榊乃亞と言う女性が来たら、娘へ面会させて貰いたい。別に君の事を責めている訳ではない。原因は学園の寮で起きた出来事だ」

「……分かりました。では、その榊乃亞と言う娘が来たら、美智子君に面会させればよろしいですね」

「そうしてくれたまえ」

「面会の時間はそれ程長く取れないが、それでも構わないかね」

「はい、5分ほどいただければそれで」

「……それでは案内しよう」

「お願いいたします」

友田は、重い腰をあげた。

U
<U>

其の九：接近

接近

「さて、ここが和田美智子君の病室だよ」

友田は、乃亞を病室の前まで案内すると、自ら病室のドアを開けた。

今は外部の者が入らない様にと、個室の中でも滅多に使わない大きめの部屋を用意していた。室内には大きめのテレビをはじめ、およそ他の一般病室とは一線を画したホテルの様な造りになっている。

もちろん、部屋の中は空調が管理されていて、窓を開ける必要はない。

ところがである、友田がドアを開けると、病室の中を五月の爽やかな風が流れ込んでいた。

「おい、この部屋の窓を開けたのは誰だね」

「窓が……」

友田が後ろに従っていた看護師に詰問すると、看護師は私じゃありませんと頭を振るだけだった。

そんな友田達のやりとりを横目に、乃亞は友田達の横をすり抜ける様にして病室の中へと入っていった。

「あ、おい君……」

つられる様に友田も病室の中へと続く。

病室は個室となっており、ドアを開けると直ぐに仕切があって、

全体を見渡す事が出来なくなっているのだが、それをすり抜ける様に乃亞は部屋の中央へと向かった。

仕切を越えると、正面に開け放たれた窓が見える。中央右手に大きなベッドが設置されていて、和田美智子はそこで規則正しい呼吸を繰り返していた。

乃亞は部屋に入ると、和田美智子の姿を一別した後、開け放たれた窓の方へと急いだ。

「……」

「おい、君。榊君と言ったかな、勝手な事をされては困る」

続けて入ってきた友田は、乃亞が特別何をしている訳でもなかったので、とりあえず安心したのだが、依然、油断をする気がないのか、それとも自らの威厳を保ちたかったのか牽制の声をあげた。

「申し訳ありません……」

乃亞が素直に謝るのを見て気持ちを落ち着かせたのか、友田はベッドの上で未だ目を覚まさぬ和田美智子の様子を確かめた。

もしかしたら目覚めているかも知れない　と、僅かばかり期待した友田だったが、規則正しく呼吸を繰り返しながら眠り続ける姿に、淡い期待が消えた。

しかし、落胆した表情を目の前の少女には悟られては行けない。

友田は平静を保ちながら和田美智子の脈を取った。

脈拍は通常のそれとほぼ変わらないし、呼吸が乱れると言った様子も見られない。ただ、通常と違う事があるとしたら、一向に目を覚ます様子が無いただだった。

一体、どうしたと言っのだろう……当初の見込みでは、外傷も無

ければ脳波も安定していたし、簡単な検査の結果、これと言った病気の予兆らしきモノが何一つも見つけられなかった。

なので、特に詳しい検査も行わなかったし、きつと直ぐに目が覚めるだろうと、タ力をくくつていたのだが　友田はベッドの上で規則正しい呼吸をしている和田美智子を見て、ため息をつかずにはおれなかった。

「さて、そろそろ良いかな？」

一通りの作業を終わらせると、友田は一刻も早く和田美智子の精密検査を行いたいと言う思いと、目の前の少女を早くこの病室から返したいと言う思いから、もう良いだろう　と、あからさまな表情を作つて乃亞へと告げた。

先ほど乃亞が病室へ駆け込んだ際、相手が以外とおとなしく自分の言葉に従つた事から、少し強気で出れば、目の前の少女は何も反論出来ないとかかをくくつたのだ。

ところがである。

「申し訳ありませんが、5分程、私と和田美智子さんの二人きりにさせていただきます」

「な　」

友田は一瞬、目の前の少女が何を言つたのか理解出来なかった。

「しかし君、この通り彼女は一向に目を覚まさない状況で、一体何をすると云うのだね……彼女に何かをするのなら、医者としては承知出来ないな」

当初の予想では、とりあえず目の前の少女を病室に入れ、適当に面会させて早々に追い返そうと考えていた。

和田氏からの依頼で仕方なく案内はしたものの、やってきたのが

高校生らしき少女であつたので、何が出来る訳でもない　と、
安易に考えていた。

この程度の年齢ならば、こちらが少し威圧的に出れば何も言えなくなるだろう　と。

しかし目の前の少女は違っていた。

「和田美智子さんと二人きりになる事も、許可されていると思いますが」

と、こればかりは少しも引く気は無いと言った姿勢を見せてきた。

友田としては、これ以上強引に少女の申し出を拒否するわけには
いかない。少女の言うとおり、和田から面会の許可ならず二人きり
になる事も承知する様にと、言われていたからである。

「……」

それに、これ以上何かを言えば、目の前の少女を通じて和田の方
へも報告が行くに違いない。何を隠している訳ではないが、失態を
続けている自分としても、これ以上は強く出られなかった。

「分かった。ただし、五分だけだ。彼女はこれから精密検査を受け
て貰うのでね、本当は面会も断りたかつたのだが……」

友田は最後に、少々くぎを差しながらも、了承せずにはおれな
かった。

「ありがとうございます。それでは五分後、私がこの病室から出る
まで人が入らない様をお願いします」

くっ

「分かった、病室の前に看護師を待たせておくから、時間になったら看護師に声を掛けてくれたまえ」

そう言つと友田は、付いてきた看護師にドアの前に残る様に指示すると、自分は自らの部屋へと帰って行った。

カチャ

ドアが軽い金属音を立てて閉まるのを確認すると、乃亞は和田美智子のベッドへと近づいて行った。

「和田美智子さん……聞こえていますか？　今から私は、貴女の中へ入ります」

そう言つと乃亞は、親指を自らの額に、そして小指の先を和田美智子の額へと軽く当てると、小さく何かをつぶやいた。

「我が言は御言なり、我が前に在りし一霊四魂には静を、悪しき四魂を払い給え清め給え、掛巻くも綾に畏き神伊邪那岐大神……富普加美　恵多目　払い給え　清め給え」

そして言い終わると共に大きく息を吸い込み、乃亞は和田美智子へと唇を重ねて息を吹き込んだ。

んうつ　　和田美智子から吐息が漏れる。

そうした後、乃亞はふわりとして、自らの身体が宙に定まらない状態の中に投げ出されていた。

周囲は深く、真の闇に囚われていて一切の音も無く、宇宙空間に

投げ出されたかの様に自らの位置すら定まらない状態である。

これが、今の美智子さんの状態ですか 乃亞はそうつぶやくと、また、言葉を紡いだ。

「ひ、ふ、み、よ、い、む、な、や、ここ、たり、もも、ち、よろず」

乃亞の発する言葉は、一切の音も通さぬ暗闇の中でも、透き通る清水の様にこだまする。

「全て世は、陽の昇らぬ事はない様に、人の心にもまた、陽の昇らぬ事は無く、全ての罪、穢れもまた、その陽によってうち払われる事でしょう。願わくば氣吹戸主神いぶきとぬしのかみのお力を持ちて、全ての闇を吹き払い給う事を畏れ多くもお願い申し上げます」

闇に閉ざされた空間の中に、凜とした乃亞の声が響き渡る

すると、何処からとも無く、一陣の風が周囲の闇を巻き込むかの様に吹き荒れると、今までの様子が嘘の様に光りがあふれ出した……そして、自らの殻に閉じこまるかの様に、膝を抱える一人の少女が現れていた。

乃亞はそれを確認すると、ゆっくりと近寄って声を掛けた。

「美智子さん……聞こえていますか」

……

「美智子さん、私は榊乃亞と申します。美智子さんを連れ戻しに来ました」

……

「美智子さん、貴女は今、病院のベッドで眠ったまま、夢の中でさまよっている状態です……あの夜、貴女に一体何があったのですか」

……

「今はもう、貴女に危害を加える者にはいません」

「い……やつ」

「美智子さん？」

「いやっ」

「落ち着いてください。貴女に危害を加えようとした者はここにはいません」

「いやあ！私は誰のモノでも無い！！私は私だけのモノよ！！」

乃亞の問いかけに、和田美智子は全ての接触を拒むかの様に、自ら、その両耳を塞いで拒絶の声を挙げた。

これは、彼女が病院に運ばれる前と同じ症状ですね　　乃亞は和田美智子がどうしてこれ程までに他者に対して拒絶の体を取るのか、一番興味深い事であったが、取り合えず、何時までもこのままでは埒があきそうもない。

天天急々如律令！

乃亞は手を組み合わせて印を造り短く言葉を紡ぐと、最後に和田美智子の両肩に気合いを入れるかの様に手を当てた。

「は　　あ」

と、両肩に手を当てられた和田美智子は、それまでの混乱が嘘の様に、一気に強張った身体から力が抜け落ちた。

静寂の中では、和田美智子の規則正しい呼吸の音だけがこだます

る。

「美智子さん、落ち着きましたか？」

和田美智子が落ち着きを取り戻したのを確認した乃亞は、そつと、囁く様に彼女に声を掛けた。

「私は……」

「気が付きましたか？」

「あ、貴女は？」

和田美智子は、乃亞に声を掛けられて初めてその存在に気が付いた様子だった。

「初めまして、私は榊乃亞と申します」

「ここは……どこ、なんですか」

見渡す限り、周囲には壁一つ無い白色の世界。彼女は数度周囲を見渡すことによって、漸くその異変を認識した様子だった。しかし乃亞は、その質問に答えずに話を続ける。

「美智子さん……と、お呼びしてもよろしいですか？」

「え、ええ。貴女は？」

「私は榊乃亞と申します。美智子さん、貴女は今、病院のベッドの中で眠りに付いています。覚えてらっしゃいますか？」

「病院の……ベッド……」

「はい、貴女は二日前の夜、何かしらの出来事によって気を失い、そのまま眠り続けている状態です」

「二日前の……夜……ですか？」

「はい、私は貴女に起きた出来事を確かめるべく、貴女の意識の中に直接会いに来たのです」

え？

和田美智子は一瞬、目の前にいる少女の言葉を理解することが出来なかった。

いや、出来るはずがなかった。目を覚ましたと思ったら、周囲一

辺、見知らぬ場所に立たされて、見ず知らずの少女に『意識の中に直接会いに来た』などと言われて、誰がそれを理解出来ると言うのか。

人は自らの常識の範疇にあるものを基準に判断を行う。

実際に手に触れたり、その仕組みを解明して理解出来る事象ならば、それは常識として受け入れる事が出来る。しかし、その逆はどうであろう。意識などと言う、手に取ることも出来なければ見ることも出来ない形のないものであり、その定義すら確立されているとは言いがたいもの。

その様なものを、瞬時に理解して受け入れられる者など皆無と言つてよい。

しかし和田美智子は、目の前に立つ少女の言葉を、嘘とは思えなかった。

そればかりか、事実、ここが『自らの精神世界の中』であることを、すんなりと受け入れてしまった。

それは、目の前に立つ、自分と同じ位の少女のせいなのか……それは判断出来なかったが、とはいえ、このような突拍子もない話を、不思議に思わない自分に違和感はなかった。

「榊……乃亞さん、と仰いましたね。私は一体どうしたと言うのでしょうか？それに……」

「乃亞で構いません」

「それでは乃亞さん、私は一体どうしたと言うのですか？二日前の夜に、何があつたと言うんでしょうか。それに、貴女はどうしてこんな」

「美智子さん、私は先ほども申したとおり、二日前、貴女に何が起きたのかを調査する為に来たのです。何も、覚えてらっしゃいますか？」

「二日前……」

「はい、二日前とは言つても、貴女に取つては直前の記憶と言う事

になるのでしょうか。貴女は二日前の夜、友達である国府田雅美さんの部屋を出てから自室に戻り、それから一時間ほどの後、寮の廊下で何かにおびえる様にして気を失いました」

「私が」

何も覚えてないのですね　　乃亞は和田美智子の様子から、彼女

がああ夜の事を記憶していない事を悟った。

何が起きたのかを理解する前に気を失った……あるいは　　乃

亞は病室の窓が開いていた事を思い出す。

記憶を　　消された？

和田美智子が、必死に何かを思い出そうとして、それが無駄な努力に終わっている様を見、乃亞はそれが間違いではないと思った。

それも、自分が病室に来るまでの、何分かの間である事も。

そう　　本当に僅かの差で。

「美智子さん、思い出せないのならば無理をしなくても良いのです。ただ、そう言う事実があつた事だけは覚えていてください」

「解らない……私は、本当に二日も眠ったままだったなんて……解らない」

「はい、解らない事はそのまま良いのです。それを調べるのは、私の役目ですから」

「乃亞さん、一体貴女は？」

「信じてもらえなくても結構です……ですが、私は貴女の味方です」
和田美智子は、この初めて合う乃亞と言う少女の言葉に、信頼出来る響きを感じ取る事が出来た。

「あの、こちらに私の友達が入院しているハズなんです」
国府田雅美は病院の受付に来ていた。

「お名前はなんと言いますか？」

「和田、和田美智子です」

「少々お待ちください」

受付の女性が、手早く手元のパソコンを操作する。

「申し訳ありません、その患者さん、今はまだ面会謝絶になっていて身内の方以外では、お通しする事が出来ない決まりになっています。失礼ですが、貴女は身内の方ですか？」

「い、いえ。私は学校の同級生で身内ではありません」

「そうですか、せっかく来ていただいて申し訳ありませんが、面会することは出来ませんので……」

「そう……ですか。それで、美智子はもう、意識は取り戻したんですか？」

「申し訳ありません、それは私の方からはお話することは出来ない決まりになっていますので」

受付の女性からは、やはりお決まりのセリフしか帰ってこなかった。

雅美は面会が出来ないであろう事を、予め雨宮から聞かされていたのだが、案の定それが出来ないと知って、改めて美智子の事が心配にならざるを得なかった。

「解りました。また、今度来ます」

雅美はしかし、受付の女性にしつこく迫る様なまねはせず、そのまま受け付けを離れると、病院の外で待っていた雨宮と合流した。

「どうだった？」

「貴弘の言った通りだった。まだ面会謝絶だ……」

「やっぱりな　雨宮は自分の考えが間違っていない事を知った。

「それで、これからどうするの貴弘」

「そうだな……取り合えず」

と、そこまで言いかけた雨宮は、ある人物を見て言葉を切った。
「どうしたの？」

雅美が雨宮の視線の先を追う。

「あれは、生徒会長の……」

「かぶらぎまろ 鎚木政志だったな。隣の女の子は誰だか解るか、雅美」

「確か…… 鎚木さんと同じ生徒会の先輩だったと思うけど」

雅美は、鎚木政志という少女が、彼といつも一緒に行動しているのを知っていたが、名前がどうしても思い出せない。

「俺も鎚木の事は思い出せるんだが、隣の女の子の名前が思い出せない」

「でも、それがどうしたの？」

「いや、別に……」

雨宮は未だ腑に落ちない顔で、

「何でココにいるのかなと思ってな」

鎚木政志とその女子生徒は、雨宮達に気が付かないまま病院を後にするところだった。

それを見ながら雅美は

「生徒会として、美智子のお見舞いに来たとか？」

「ああ…… そうかもな」

「何よ貴弘、一体生徒会長がどうしたの？」

未だ何やら考え事をしている雨宮に雅美は不思議に思った。

こういう時の雨宮が、何を考えているのか解らない。

「いや何、鎚木といつも一緒にいる割りに、俺が可愛い女の子の名前を知らないって思ってたな」

「……」

「貴弘って、本当に何考えてるか解らないよね」

「まあ、冗談はさておき、生徒会長なら美智子が面会謝絶だって事くらい知ってるはずなんだが」

「でも、一応お見舞いくらいは来るんじゃないの？」

「それも…… そうだな。とにかく、俺たちも行動を開始するか」

「

雨宮はそう言つと、気持ちを切り替えるかの様に、病院の中へと向かつて歩きだした。

つづく

其の十：病室

病室

「多分あれだろうな……」

病院の五回、階段を上りきった後の踊り場の影から覗き込んでいた雨宮は、病室の前に看護師が付いている病室を見つけると、それにあたりを付けた。

「だけど貴弘」

雅美も雨宮同様、踊り場の影から少しだけ顔を出して確認する。

「あれが美智子の病室だとして、美智子はまだ目を覚ましてないんですよ。一体どうするの？」

「まあ、病院側が本当の事を言っているかも知れないが、目を覚ましているとも限らない。目が覚めていればそれに越した事はないし、目が覚めていなければ、それを確認するだけで良い」

「うーん、まあそれは良いとして貴弘、一体どうするの……アレ」

と、雅美は病室の前でつまらなそうにしている看護師を指さした。

「雅美」

「なに？」

「お前、今から病気になれ」

「ええ!？」

「うん、そうだな、お前はこれから『あの看護師』の目の前で貧血になれ」

「ええ!？」

「うん、うん、それが良い」

「ちよつと貴弘」

「まあ言うな。お前が高血圧ならまだしも、貧血なんてこの先絶対にあり得ないと思うが、今日初めて貧血になれるんだ、喜んで貧

血になれるよな」

雨宮はしれつとした顔で言う。

「初めての経験って良いモンだろ」

と、意味ありげな表情で雅美の背中をたたいた。

「絶対にあり得なくて悪かったわね」

雅美は鬼の形相とひじ鉄で答える。

「うぐつ、まあそれは良いとしてだな雅美様、あの看護師の前で貧血になってももらえると非常に助かるんですけど」

「……ま、良いけどさ。だけど、私演技なんてした事無いのよ、それに、貴弘じゃ無いけど貧血なんて経験ないし」

「それは何とかなる。貧血の経験が無いのなら、気持ちが悪いつて言っても良い。とにかくあの看護師をドアの前から離してもらえれば、それでオーケーだ」

「だけど、あの部屋が美智子の病室じゃ無かったらどうするのよ」

「美智子の病室じゃ無くても、間違えましたで済むさ。それよりまさ、ほら」

と言つて雨宮は、雅美の背中を押した。

ちよつと貴弘　　雅美は文句を言い掛けたが、病室の前にいた看護師が雅美の姿に気が付いた。

もう、やるしかないじゃない！

雅美は覚悟を決めた。演技の経験など無かったが、やる事が決まれば江戸っ子の血がそうさせるのか、決断は早い。少しうつむき加減に看護師のいる病室の方へと歩いてゆくと、壁に手を掛けてうづくまった。

実際、ここまでやる必要があるのか疑問に思ったが、もう、やつてしまった事は仕方がない。

自分が適当に看護師を惹きつけて貴弘があ病室に入れれば……
「どうしたのあなた？大丈夫」

演技とも知らず、看護師は壁に手を掛けてうづくまった雅美に気

が付き、駆け寄ってきた。

「す、すいません……私、友達のお見舞いに来ていたんですが、急に目眩がして……」

「貧血？」

「は、はい、普段から貧血気味で……体育とかも見学が多いんです……」

と、雅美はいつになく弱々しい風体を装って看護師の方へと身体を預けた。

ちなみに、雅美の体育の評価は常に5だった。もちろん、5段階評価である。

「困ったわね、私、ここを離れる訳にはいかないんだけど……それに、人に身体を預ける程の貧血なら、きちんと診てもらった方が良いわ。ナースコールで誰かに来てもらおうかしら」

「ええっ！」

「わっ、びっくりしたあ、どうしたの突然大きな声を出して」

「い、いえ、貧血気味で力のコントロールが出来なくて」

苦しい言い訳だとは解っていたが、これ以上の説明など思いも付かない。それよりも、この場に別の看護師など呼ばれでもしたらまずい。雅美は看護師に預けていた身体を離すと、乾いた笑顔を作りながら言った。

「あ、あの、いつもの事なので、少し休めばよくなると思うんです。そうだ、下の階に長いすが置いてありましたよね、申し訳ないんですが、そこまで良いので、肩を貸していただきたいんですけど」

「うーん……顔色がさっきより悪くなった気がするけど」

悪くもなるわよ　と、心の中で思いつつも、雅美は少し戦法を変える事にした。

「そうですか……解りました。私、一人で戻ります。看護師さんにはお仕事がありますものね。私みたいなただの貧血で、看護師さんの大切な仕事のじゃまをしては申し訳ありません。ごめんなさい看

「護師さん、私がもう少し頑張れば良かったんです。じゃ、戻ります」と言うと、弱々しさを保ちつつも、階段のある方へと向かって歩き始めた。

「ああ、ちょっと待って……下の長椅子まで大丈夫？なら、やっぱり付き添って行くわ」

来た！ 雅美は内心、相手の看護婦が食い付いてきた事を感じた。

『押してダメなら引いてみな』と言うのは、江戸っ子のお爺ちゃんの言葉だ。生前は、鉄砲玉みたいだった と、おばあちゃんに言われていたとおり、無鉄砲だったお爺ちゃんだが、おばあちゃんに交際を申し込むときにはあの手この手で攻めたらしい。結局おばあちゃんを落としたお爺ちゃんは、何度もその時の話を、楽しそうに語っていた。

雅美はそれを思い出して、実行してみたのだ。

目の前にいる女性も一応は看護師だ。目の前で辛そうにしている人間が助けを断られて、それでも健気な姿を見せれば、放っておけるはずがない……って、なんだか私、虚しい気持ちになるのは何だろう。

人をだます事に一生懸命になっている自分に、雅美は少しばかりの虚しさを感じずにはおれなかった……が、とにかくにも目の前の看護師を、病室の前から離れさせるのが第一の目標である。

多少の事には目をつぶるとしよう と、雅美は自分で自分を納得させる。

「あ、ありがとうございます……助かります……」

雅美は多少の罪悪感を感じながらも、貧血で苦しむ可憐な少女の役を演じ続けた。

私って、以外と演技の才能があるのかしら と、こちらも多少の勘違いを持ちながら。

だがしかし、この行動のおかげで病室の前に張り付いていた看護師を、階下の長椅子までではあるが、引き離す事に成功したのも事

実である。雅美は看護師の付き添いの元、一階下にある長椅子まで行くために、階段のある方へと歩き出した……

って！？階段には貴弘がいるじゃない！！

どどどど、どうしよう。

雅美は階段に向かう途中、その事実に気が付いた。

この五階は一般病室とは違い、限られた人しか使わない場所らしい　　と言うのは雨宮から聞いていた話である。

「きつと美智子も、五階の特別病室に入っているに違いない」という雨宮の言葉から、二人はここにやってきたのだ。そして、看護師が病室の前で待機していると言う、いかにも怪しい場所を雨宮は美智子の病室だと断定し、その為に今こうして、自分がその看護師を病室の前から引き離したのだ。

それなのに、階段で待ちかまえている雨宮が看護師に見つかったら元も子もなくなる。一般病室とは違い、この五階の病室に入院している人達は、『訳ありな患者』もいると言う。つまりは、雨宮がこの看護師に見つかれば、必ず咎められると言う事だ。

もしその際、上手い言い訳でもあれば良いが、嘘がばれれば、自分の嘘もばれるだろう……嘘がばれれば、学園側にも連絡が行く。

それだけはまずい。

学園側に知られ、厳重注意される程度ならばこれと言ってなんの問題も無い。しかし、それで学園側からの監視が厳しくなっ、これからの行動に制限が加えられるのは上手くない。

事件の調査は始まったばかりで、これからまだまだやらなければならぬ事は山ほどあるハズ。ここで躓いて、これからの調査がやりづらくなっ、犯人を追いつめられる可能性も低くなる。

雅美は考えれば考える程、冷や汗とも脂汗とも取れない嫌な汗が、

吹き出してくるのを感じた。

「あなた、大丈夫？ 凄い汗だけど……本当に体調が悪そうね。やっぱり先生に診てもらった方が良いわね」

そんな焦りもつゆ知らず、ダラダラと汗をかき出した雅美を、看護師は本当に体調が悪いモノだと勘違いしていた。

「ただだ、大丈夫です。下の長椅子で休めば直ぐにも直りますから」

ひえゝ

雅美は『本当に』目眩が起きそうだった。

そうだ、お爺ちゃんは今も言ってたっけ……江戸っ子は嘘だけは付いちゃなんねえ　　って！！

雅美が混乱に陥っていると、階段の踊り場はもうすぐそこまで迫っていた。

一歩、また一歩と、どうしよう　　と言う堂々巡りの焦りとは関係なく、階段の踊り場にどんと近づいて来る。

も、もうダメだ　　と、観念したその時、雅美と看護師は踊り場にたどり着いた。

「え？」

と、その光景に、雅美に張りつめていた緊張が、一気に抜け落ちる。

そこには、雨宮の姿は見つけられなかった。

「はあゝ」

思わずため息がでる。

「ねえあなた、本当に大丈夫？」

「へ？」

隣で付き添っていた看護師は、雅美の脱力さ加減に本気で心配しだしていた。

「だ、ただ大丈夫です。いつもの事ですから……ははっ」

くゝ貴弘のやつ、これじゃ本当に貧血になりそうだわ！

雅美は、初めて貧血と言つ感覚を知った。

「だけど貴弘、一体どこに隠れたのかしら……」

「さてと……」

雅美はうまくいった様だな。

雨宮貴弘は、雅美が看護師を引きつけて四階へ降りてゆくのを確認すると、手早くその身を病室の前へと滑らせて行った。

階段の踊り場から左に曲がると、廊下を挟んで両側に病室のドアが並ぶ。一般病棟に比べると、五階の病室は大きめに作られているのだろつ、個室のドアの数は三分の二程度だった。

看護師がついていた病室は、左側の手前から三つ目。歩数にして二十歩。

一、二、三、四、五、六……

誰かがこの病室に近づいています

乃亜は短くそう伝えたと、美智子に向かい直った。

「美智子さん、もうあなたは目を覚まして大丈夫です。ただ……少しお願いがあります。今からここに来る人は、どうも病院関係者とは違う方の様です」

「私はまだ、目を覚ましていない……と言う事ですね」

彼女の意図することを察したのか、和田美智子は、乃亜がすべてを言い終わる前に自ら口にした。

「良く、おわかりになりましたね」

「何となくですけど、乃亜さんは、私に起きた事を調査してくださいのですね。私に取っては全く覚えのないことなので何とも言えませんけど……今ここに向かっている人が病院関係者ではなく、乃亜さんがわざわざそれを伝ええると言うことは、その人も調査対象の可能性がある」と

「その通りです。幸い、この病室の中には身を隠す場所があります。この病室に入ってくるかどうかは分かりませんが、もし、この病室に入ってくるならば、私はその者の行動を観察しておきたいのです」
「わかりました。それならば、私はまだ眠ったままの『ふり』をしていれば良いのですね……ですけど、近づいてくる人が、病院関係者ではないと、どうしてわかったのです？」

「それは、近づいてくる者が、不自然な位に気配を消しているからです」

乃亜はそれだけ言うと、和田美智子には聞こえないほどの小さな声で何かをつぶやいた。

すると 周囲が一瞬にして暗闇に包まれ、和田美智子の精神世界から、二人の姿が消えた。

十五、十六、十七、十八、十九、二十……と。

雨宮貴弘は、目指す病室の前に立っていた。

ふむ、目測通りだな

一応周囲に目配せをするが、気が疲れた様子はない。

「もつとも、一般人には見つかるわけもないけどな」

一人つぶやくと、雨宮は病室のドアに手をかけた。

鍵が掛かっている可能性も考えたが、さすがにそこまでは心配いらなかった。慎重に、音を立てないようにドアノブを回すと、ドア

はすんなりと開いた。

雨宮は素早くその身を病室に滑り込ませる。

この五階にある病室は個室になっており、噂通りに他の一般病室とは違って完全な防音になっている。訳ありの患者も多いと言う病室なので、その辺の設備は必要なのだろう。

雨宮はしかし、気配を消すことをやめなかった。

目の前にある仕切となっっている衝立から、素早く病室の中をうかがった。

もし病室の中で、医者が患者を診ている最中だった場合、戦略的撤退を行う為である……が、雨宮の読み通り、部屋の中には誰もいなかった。

いや、誰もいないと言うのは誤りである。

部屋の中央右手に大きなベッドがあり、その中で、雨宮も良く知る人物が、今も眠りについていたのである。

「んんっん」

もつともらしく咳払いをしてみる。

が、やはり美智子は目を覚ますどころか、声に反応する様子もない。

「……」

よほど眠りが深いのか、それとも未だ目を覚ましていないのか、今の段階では判断出来ない。

雨宮はベッドへと近寄った。

「おい美智子、起きろ、朝だぞ……」

今度ははつきりとした声に出して呼びかけてみる。しかし、それにも反応する様子は見られなかった。

「美智子、起きないとキスしちゃうぞ」

「……」

雨宮は美智子の顔を覗き込むと、一つため息をついた。

今まで、大体予想していた通りだった雨宮だが、和田美智子が目を覚ましていないことだけが想定外だった。僅かな可能性としては考えていたモノの、本当に目を覚ましていないとは思っていないかったのである。

雨宮は、未だ和田美智子が目を覚ましていないと言われていたが、それは事件の性質上、見せかけの事だとたかをくくっていたのだが、考えを改めなくてはならない。

「どうしたもんかね……」

雨宮は腕組みをしながら考えた。

雅美が時間稼ぎをしているとは言え、残された時間はそう長くはない。とは言え美智子が目を覚ましていない状態では、手の打ちようがないし、この先事態が展開するはずがない。

強制的に目を覚まさせる方法を考えてみる。

まず、美智子の状態を考えてみよう。何らかの病気を考えれば、強制的に起こす事はやってはいけないだろう……しかし、見た感じでは集中治療の器具がついているわけでもないし、その他、検査器具もつけられていない。言うことは、肉体的な要因ではないと言うことが。

だとすれば、内的要因なのだろう。

内的要因 すなわち心の問題。

あの夜、精神的な問題が起きて、美智子は意識を取り戻さないのか…… いや、自ら殻に閉じこもっているのかもしれない。

だとすれば、美智子が目を覚ますのは長引くかもしれない。いや、このまま目を覚まさない可能性もあるのではないか。

「……」

それ程までに精神的な衝撃を受ける事とは何なんだろう と、

雨宮はその事に興味を覚えたが、何にせよ、美智子が起きなくては調査が難しくなる事は目に見えている。

それに、犯人を捕まえるとしても、彼女の意志も確認しておかなくてはならない。

「どうしたもんかね……」

やっぱり強制的に目を覚ましてもらわない事には始まらないのだからうか？

美智子もこのまま目を覚まさなければ衰弱してしまうだろうし。

雨宮は組んだ腕に力を入れた。

「眠りの姫を起こすには、王子様のキスと相場は決まっているんだけど、俺に出来るかどうか」

「何が出来るんでしょうか？」

なっ

突然背後から声を掛けられた雨宮は、いつものへらへらとした表情を保つ事が出来なかった。

つづく

其の十一：駆け引き

駆け引き

「何が出来るんでしょうか？」

なっ

誰もいないと思っていた背後から突然声を掛けられた雨宮は、いつものへらへらとした表情を保つ事が出来なかった。

そして、冷静な状況判断を怠ってしまった事を悟った。

雅美を使って看護師を排除したまでは良かったが、病室の中を良く確認しなかったのは雨宮の失策である。

病室は入り口の所に衝立があるモノの、それ以外にも個室のトイレなど人が隠れる場所はいくらでも在ったのに、それを雨宮は怠ってしまったのだ。

何故か　そう、それは雨宮が人の気配と言うモノを、この病室から『全く感じなかった』からで、だからこそ目視での確認を怠り、背後からの接近を許してしまったのである。

気配を殺していた？いや違うな、気配を消していたんだ　雨宮は結果に対しての状況判断を瞬時にし、乃亜への対応を考えようとした。

しかしこれは、乃亜の言葉の前に完全に封じられてしまった。

「この病室は現在、関係者以外立ち入り禁止になっているはずですが、あなたはどうしてこの部屋に？それも　」

雨宮はこの程度の質問ならば、持ち前の機転を持ってすれば如才なく答えられただろう。

しかしそれを許さなかったのは、乃亜の次の言葉だった。

「それも、どうして気配を『殺し』ながら来たのですか？」

「ぐっ」

正に不意打ちだった。

確かに雨宮は気配を殺していた、しかし、完全に気配を『消して』居たわけではなかった。

いや、出来なかったと言った方が正しい。

気配を殺す事は訓練次第でどうとでもなる技術であつたが、完全に気配を『消す』となれば別で、雨宮にはまだまだ完全に来る事ではなかったからである。

それを目の前にいる少女、乃亜が不意打ちの様に指摘したのだ。

どういう事だ？

雨宮に緊張が走った。

全く気配の『無かつた』はずの背後から、突然声を掛けられた。

それはつまり……イヤ、下手な答えを言うよりも相手の観察が先だ。これ以上の失策を許されない雨宮は、質問に答える前に目の前に突然現れた乃亜を素早く観察し、そして分析する事に集中した。

雨宮から見ると、乃亜は年齢が不詳であつた。

背格好から推測すれば自分とそれ程変わらない、言ってしまうば同年代なのだろうが、その大人びて見える言動と、吸い込まれそうな程に深い瞳と端正な顔立ちからどうしても実際の年齢よりも上に見えるのだが……雨宮にはその辺の判断がつかなかった。

いや、実際年齢は上の様に見えるが、それは彼女が持つ雰囲気こそうさせているだけで、年は俺と変わらないはずだ。それにしても不思議な雰囲気を持っていると言うのが雨宮の判断だった。

まあその辺は後回しだ　　雨宮は状況を分析することにした。
さっきも思ったのだが、もし俺が美智子の敵と過程して声を掛け
たにしては、距離的に俺の方が近くににいるのに声を掛けたと言う事
は、この程度の距離など問題にならない程度の自信がある　　と
言う事だろう。

雨宮は乃亜との距離を自分の歩幅で正確に四歩だと目測した。
だが、この四歩の距離をもともしないのはどういう事か？

例えば相手がナイフなどの刃物を隠し持っていた場合、そのナイ
フを取り出すまでの時間でこの四歩の距離を無効とし、凶器を確保
した上で相手を無力化する技術　　雨宮は居合いが頭に浮かんだ。
しかし目の前の少女は刀剣はおるか、その手には何も握られてい
ない。

つまりは体術のみでこの距離を一頭足のうちに詰めて、相手を無
力化出来ると言う事である。

それとも、目の前の少女は何か飛び道具の様なモノを隠し持つて
いるのだろうか？　　いや、暗器の類を持つているにしても、あ
まりにも自然体過ぎて考えにくい。

雨宮は改めて目の前の少女を見るが、少女は全くと言って自然体
で、それでいてその瞳から視線をはずせなかった。

問題はそればかりではない。

全く気配を感じなかった。

そう、雨宮は乃亜の気配を微塵も感じられなかったのである。
気配を『殺して』いたと言うレベルではなく『消して』いた所か
ら考えるに、これ以上不用意に動けば確実に殺られるのはこっちか

雨宮はただならぬ思考に背筋に冷たいモノを感じた。

しかし　ではどうして声など掛けたのか？

もし、美智子をこの様な状況に陥れた犯人が、証拠を消すためにこの病室に忍び込んだとして、気配を消せる程のモノが声を掛けるのか？

イヤ違うな……もしかしたら……

雨宮はゆっくりと両手を上げて全面降伏と言ったポーズを取った。
「気配を殺して来たのは病院関係者に見つからないため。面会謝絶になっているし看護師が病室の前に張り付いていたからな。そして、この病室に来たのは美智子の事件を調べるためだ」

雨宮は正直に語ることにした。

「何故美智子さんの事件を調べているのですか？」

「友達だからだ」

その言葉の後、雨宮と乃亜の二人は互いの瞳から視線を切らさなかつた。

深い瞳だ　雨宮は目の前で自然体にいるにも係わらず、まるで隙が無く、そして容赦もない瞳に吸い込まれそうな錯覚を覚えた。

「美智子さん……起きてても大丈夫ですよ」

なに！？

いつまでも続くかと思われた沈黙はしかし、乃亜の方から終焉を告げた。

「良いんですか？私が起きても」

「おまつ、美智子お前……目が覚めてたのか」

なんて事だ！まさか美智子の奴が目覚めているとは　不意打ちにも程があつた。未だ美智子が目を覚ましていないと思つていた雨宮にとって、それは不意打ち以外の何者でも無かつたからだ。

とどめに、「雨宮君、王子様のキスはあなたのお姫様にしてね」と美智子にからかわれてしまったては、雨宮としては、文字通り『お手上げ』である。

「つつ　趣味悪いぞ、美智子」

この男にしては珍しく、赤面せずにはおれなかった。

「でだ、俺は手をおろしても良いのかな？」

予想どおり、どうやら目の前にいる少女は美智子の敵ではないらしいな……雨宮は、未だ上げっぱなしだった手のひらを、手持ちぶさたと言ったふうにグーパーとしながらおどけた態度を取っていた。

どうぞ　と、乃亜はあくまで自然体で答える。

「どうしてだ？」

雨宮のこの問いは、目の前で終始自然体を貫き通している乃亜に向けるものだった。

「どうして？とは、どのような事を指しているのでしょうか？」

「質問に質問で答えるのはどうかと思うが、説明がいるならそうしよう。どうして敵の可能性がある俺に、美智子が起きている事を教えたのか　だ。俺が敵であった場合、もしかしたら事件の事を隠蔽するために美智子を殺す可能性があるにもかかわらずだ」

和田美智子は『殺す　』と言う単語にぞつとした。

「あなたの質問にはおかしい所がありますね……別に友達ならば美智子さんが目覚めている事ぐらい知っていても良いと思いますけど。それに、敵　と言うのはどういう事なのか……私には解りかねますが」

「ふん、言ってる　」

とぼけているのかどうなのか……いや、こいつは絶対に知っていてやっているに違いない。

とはいえ、相手は最初から最後まで自然体でいたのだから、俺が勝手に手を挙げただけだって誤魔化せるからたちが悪い

手強いな 雨宮の乃亜に対する評価はさらに深まった。

どのような状況に陥ろうとも、四歩程度の距離では遅れは取らない
雨宮は乃亜に無言でそう言われた気がしたのである。

「さて、腹を割って話をしたい」

「話と言いますと」

「美智子に事件の時の『記憶』はあったのか？」

今度は雨宮からの不意打ちだった。この質問を雨宮は、事件の当事者である和田美智子ではなく、名前も知らない乃亜に向かって質問していたのだ。

乃亜が微かに瞳を細める。

「それは直接美智子さんにお聞きになってみてはどうでしょう？」

「それは後でするさ、その前に俺はお前に聞きたい」

乃亜の雨宮を見る瞳に力が入った。

「どうしてそれを先に私にお聞きになるのでしょうか。私は美智子さんのお見舞いに伺っただけですが」

「さっきも言ったが、とぼけるにも程がある。カマを掛けるのは俺も苦手じゃないが、お互い、痛くもない腹のさぐり合いをしても事件の解決には近づくかないと思うが……それともあんたは、自分一人だけでも充分事件を解決する自信があるのか？」

「……………」

雨宮の遠慮のない問いに、今度は乃亜の方が沈黙した。

先ほどから間断なく雨宮を観察していた乃亜だったが、こう明け透けに言われてしまうと、何処まで目の前の男が事件に関して知っているのか興味をそそられる。

「美智子さんが気を失って倒れた事を事件と語り、敵と言う言葉を使いましたが、あなたはどうお考えなのですか？」

「それを聞いたら、お前はオレの質問に答えるのか？」

「それは解りません」

「ふー、どうもこちら側に不利な条件だと思うがな……あんたの立ち位置がはっきりしなければ語れない事もあると思うが？」

二人はまたしてもお互いの瞳を見つめて膠着状態に入った。

雨宮としては、全ての可能性を考えてなるべく手の内は隠しておきたかった。

相手の立ち位置が正確に解らなければ尚更である。もし目の前にいる少女が学園側の人間ならば、学園としては当然雨宮達の行動を制限するだろう。そしてそれは、犯人を隠蔽してしまう事に繋がる可能性があるからであった。

乃亜にしてみれば、これから行つ調査の事を口外して回る気はなかった。

目の前にいる男がどの様に事件と関わりを持っているか解らないなら尚更で、自分の立ち位置を教える事で、これから行つ調査に支障が起きる可能性がある。

二者二様にこの場でのやり取りには理由があつたのである。

お互いがお互いの立ち位置や、どれだけの情報を持っているのか……そして相手の能力がどの程度のモノなのか、この先調査の邪魔になるのかわからないのか。

腹のさぐり合いをするべきか、それとも情報を提供し合うのが得策なのか　　膠着状態には終わりが無いかとも思われた。

しかし、今度は雨宮の方から沈黙を破る事となった。

「オーケー解った」

「何が解ったんでしょう」

「いやなに、オレの目の前にいる女は、強情だって事がな」

「……………」

「その沈黙は肯定の意味で良いのか？」

「……………」

「悪かった、オレが悪かったから沈黙はやめてくれ。冗談に沈黙で答えられると、オレが堪えるから……………」

雨宮は天を仰ぎながら頭をかいた。

「だけど一つだけ質問に答えろ。オレから話を聞きたかったら、それが最低限の条件だ」

「どのような事でしょう」

お前は美智子の味方か？

それは雨宮が普段見せないほどに真面目で鋭い表情だった。

いくら相手が嘘を隠し通そうとしても、必ず見破れる。そんな決意が読みとれる程の表情で、雨宮を良く知る者が見たら別人かと思ったかも知れない。

それ程真剣で鋭い視線を、雨宮は乃亜に向けていた。

乃亜はその視線を軽く受け流す事は出来なかった。

当初は、雨宮の持っている情報などには興味がなかった。雨宮がどのような立ち位置で事件に係わっているのか、それは後で調べればどうとでもなる事だし、こちらの情報を提供するリスクを考えれば、今、この場で目の前に現れた男にそれを語る理由が全く無かったからだ。

しかし 乃亜は目の前にいる男に興味が沸いたのも事実であった。

気配を殺す技術を持ち、素早く状況判断する能力もある。そして今回の事を事件と呼び、敵という存在を意識する……その様な者が和田美智子の前に現れたのだ、興味を抱かない訳がない。

それに、自分の事でもないのに、これ程真剣な表情を向ける理由にも興味が沸いていた。

だからこそ、乃亜は相手と同じ真剣さで答えていた。

「そうです、私は最後まで美智子さんの味方です」
「ふー」

注意深く乃亜の表情を伺っていた雨宮は、あきらめの表情で溜息をついた。

「あんたの質問は二つだったな……どうしてこの件を事件と呼ぶのか。それからどうしてオレが『敵』と言う単語を使ったか」
「そうです」

短いながらも、はっきりとした返事が返ってくる。

「オレは美智子が情緒不安定で自殺を図ったり、麻薬の類に手を出すような奴じゃ無い事を知っている。だから今回のような事は『事件』で無ければ必然性が無い。それから『敵』と言う単語の件だが……」

ちらりと美智子の方へ視線を向けたが、別に隠しても後に知れる事と判断したのか、言葉を選びながらも包み隠さず真実のみを告げた

「今学園の中では美智子に関してある一つの噂が横行している……美智子が麻薬を使用し、使用したモノの残りが部屋の中から出てきたと言う噂だ」

「それが何故『敵』へと繋がるのですか？」

まるで身に覚えの無い事を聞かされた美智子が、信じられないと言った表情をするが、それも直ぐに不確かなモノへと変わる。そもそもどうして自分がこの様な病室にいるのかも覚えていないのだ、ふつてわいた様な話に、感情が追いついていなかったのである。

「その噂が意図的に流された形跡がある」

「その噂の出所が解らない　　と言いたいのですか？」

「まあ噂なんてモノは、どうしたって出所なんて解らないもんだ……その辺はどうしようも無いと思うが、しかし、断定的な情報を元に広がるうわさ話となれば、それを流した人間が絶対に居る無責任な噂なら断定的なモノにはならないだろうが、今流れているのはそんな曖昧なもんじゃない」

思い出しても腹が立つのか、雨宮は心底汚らわしいモノを見るかのような表情で続けた。

「悪意だ……その噂を流した奴の悪意を感じるんだ。その噂の中に」

今振り返ったとしても、噂が広まる速度も、内容も、それは悪意に満ちたモノである事は間違いないかった。

事件が起きた次ぎの日、学園側としては和田美智子の家は相当重要な存在であるのだから、その様な根も葉もない噂話などの様な状況になるうとも隠蔽しなければならいはずである……しかし、具体的な内容を伴って噂は流れたのだ。

それは流した人間が居る　　つまりは、美智子が二度と学園に戻れない様な環境を作り上げた結果と言える……そう、敵意を持った人物によって。

雨宮は学園を出る間際に聞いたうわさ話から、必ず『敵』が存在すると断定したのである。

乃亜にもその意図が伝わったのか、なにやら考える様なそぶりを見せた。

「現状」

今度は乃亜の方から話しかけていた。

「美智子さんの中には、事件に係わる記憶はありませんでした」

「お前……いいのか？」

「あなたは正直に話をして下さいました。ここで私が何も話しをしなければ卑怯と言うものです」

「ん？まあ理屈じゃそうなるが……正直、お前が話してくれるとは思わなかった」

「それに、美智子さんに聞けば解る事ですから」

「その一言は余計だがな」

乃亜の一言に苦笑する。

「それで……まあ、これが一番聞きたかった事なんだが……」

「私がこの件にどの様に係わっているか　ですか？」

「話が早くて助かる……が、その話の前に、美智子に少し聞きたい事がある」

乃亜に向かっていた視線を、今度は美智子の方へと向けた。

「美智子、今度の事件に関して、お前は何処まで知っている？」

つづく

其の十二：信頼

- 信頼 -

「美智子、今度の事件に関して、お前は何処まで知っている？」

え？私ですか　急に話をふられた和田美智子は、まるで当事者の意識が無い表情で乃亜と雨宮の二人の顔を交互に見つめた。

「お前は事件の時の記憶がないと言う。しかし、事件は本当にあった事だ。オレはその事件の犯人を捕まえて白日の下にさらしてやりたいと思ってる……だけれどもだ、お前がそれを望まないのならば、それはオレの自己満足に過ぎない。まあ、犯人を突き止める事は再発防止って意味でもやる事はやるが、もしそれ以上を望まないならオレも考える　　そう言う事だ」

「とは言っても……私も私がどうなったのか解らないから、感情をもてあましてるって言うのが正直なところなの」

美智子はこの時になって初めて困った顔になった。

「私はあの日、雅美のところでお茶をごちそうになってから、自分の部屋に戻って課題をやっていた……って言うだけで、それ以上もそれ以下も無いの。ただね、何かに囚われるんじゃないかってそんな漠然とした怖さだけはあったと思う……ね、雨宮君、逆に私のあの日の事教えてくれないかしら」

雨宮の問いに、逆に教えてくれと言う和田美智子。

本当に記憶が無いんだな　　顔にこそ出さなかったが、雨宮は事件が一筋縄ではいかない事を悟る。

「オレも雅美に聞いた話だが、それでも良いか？」

一言断りを入れると、今度は真剣な表情の美智子がコクリと首を立てに振った。

「話の内容としては、美智子が知っている事が全てとは言わないが、ほぼそれ以上の事は無いってのが現状なんだ……美智子が雅美の部屋で一緒にお茶を飲んでいて、夜の十時、ちょうど寮規の時間にお前が自分の部屋に戻った。雅美の話ではそれからちょうど一時間くらいした後、廊下の方が騒がしくなっていたんで外を確認したら、ちょうどお前が何かにおびえる様にして混乱していた……てな、ここまででは殆ど誰でも知ってる事だ」

時間に関しては間違いないだろう……美智子は寮規を守って絶対に夜の十時には自分の部屋に戻るのよ　　って、雅美の奴も言うてたからな。

「それでだ美智子、お前は雅美の部屋から戻ってからの一時間、自分の部屋で何をやってたかは覚えているのか？」

「え……っと、そうね、私はあの日、自分の部屋に戻ってから次の日の英語の予習をやっていたと思う。ううん、そうだね、確か次の日の英語で小テストがあるからその為に予習をしていたわ」

「そうか……でだ、その時何か気がついた事とかなかったか？いや、記憶がそこで途切れているんだっけ」

しかし、実際そんな事があり得るのだろうか？

雨宮は美智子の事を疑う訳ではなかったが、ある一定の時間帯の記憶だけを消す　　などと言う芸当が出来るのか、今持って疑問に思っているの一点である。

「そうだ、その時お前は窓を開けっぱなしにしていたのか？」

「え？窓？」

「そうだ、窓だ。あの日、事件の後で雅美が美智子の部屋に着替えとか取りに入っただが、窓が全開になっていたんだ」

窓？　　雨宮が和田美智子へ質問している間、一言も言葉を挟まずにその様子を眺めていた乃亜が、窓と言う単語に反応した。

しかし、あまりにもその反応が僅かであったのか、雨宮と美智子がその反応に気がついた様子は無い。

「窓……私、窓を開けたんだ……」

「その辺の記憶は無いのか？」

「……解らない……なんだか、自分で開けた気もするんだけど……アレ、どうしたんだろう……どうしたんだっけ……私」

「思い出せそうか？」

「……………」

雨宮の問いかけに、美智子は力無く首を振り、自分の記憶が蘇らない事に自分自身が信じられないと言った表情になった。

その辺から記憶がないのか……益々訳が分からないな　人間
の記憶は連続したモノだ。例えば何らかのイベントに参加して強烈に印象に残ったとしても、それは連続した映像の中での一コマであって、ただそれだけの断片的なモノではない。

遠足に行って現地で見た風景も、現地に行く過程と家に辿り着くまでと言う連続した事象の中に存在する一コマではあるが、やはりそれは限定的な記憶ではなく、遠足と言う一連の行動内における印象的な記憶と言うだけなのだ。

しかし、目の前にいる和田美智子に関して言えば、勉強していた時、そして今現在病院のベッドで寝ていると言う記憶があっても、窓を開ける少し前からの記憶がすっぽりと抜け落ちているのだ……記憶の欠損と言う事は人間には往々にしてあるらしいが、つい先日
の事をココまで見事に忘れるモノなのだろうか？

窓を開けたか開けなかったかなど意識もせず行う事とは言え、その様な単純な事を、この目の前にいる彼女が忘れてしまったなどとは考えづらい。

とすれば、強制的に記憶を自分自身で閉じこめたのか……それとも

「いや、良いよ美智子。無理に思い出そうとしなくても」

多分、どんなに思い出そうとしても無理だ　　雨宮には確信に近いモノがあった。

記憶は消されたんだ　　と。

正体不明ではあるが、同じ病室にいるもう一人の女……アレ？そう言えばオレはこの娘の名前を聞いていなかったな　　雨宮は急に思い出したかのように気がついた。

何故だ？このオレが女の子の名前を聞かないなんて。

しかもだ、よく見れば学園の中でも滅多にお目にかかれない程の美人……出会った状況が状況だったとは言え、オレはどうして目の前の美人に対しての意識が低いのだろうか？

雨宮は和田美智子との会話の途中ではあったが、妙にその点が気になった。

どうしたの？雨宮君

「え？どうしたって、なにが？」

「だって、なんか難しそうな顔で何か考えてたから……やっぱり窓を開けたか開けなかったか思い出せない事、問題なの？」

「あ？ああ、問題と言えば問題だが……それ程問題じゃないさ。窓を開けるなんて単純な事、誰でも意識せずに行っている事であまりにも些細な事だから、忘れても可笑しくはない」

「でも、本当に分からないの……どうしたのか、今までこんな事つて殆ど無かったからなんだか不安で」

「気にするな　　って気休めも無責任か。それに、美智子にはもつと不快な事、聞かなくちゃならないから……」

和田美智子の部屋の中から、ドラッグが発見された　　雨宮は、学園を出る前に聞いた、あの悪意ある噂の事を思い出していた。

少しでも美智子の事を知っている人間ならば、絶対に信じないはずであろう内容の噂で、雨宮から見ればバカらしくて聞く気にもならないものであった。

しかしである。そんな信じられない噂が、今、学園の中では尋常では考えられない程のスピードで広がろうとしている。いや、既に広がっていると言った方が良い。

全ての学園生がその噂を信じる訳ではないだろうが、噂とは無責任に広がり、本人の知らないところで事実をねじ曲げる。その点で言えば、今回の噂は美智子が学園に戻るのが苦痛になるはずだった。

今からオレは、それを美智子に聞かなくてはならない。雨宮はどうやって質問をしたら目の前の少女が傷つかずに済むのか？そんな偽善の様な思考に陥っていた。

それもそうだろう、自分の全くあずかり知らぬところで、自分がドラッグのせいで大声を上げて倒れた。などと噂され、そして一部の人間はそれを信じて好奇の目を向けてくるのだ。

どう考えても傷つかない訳は無い。

しかし、このまま何の知識も無いまま美智子を学園に戻す事はもとに残酷だ。雨宮は決心した表情でその事実を淡々と語った。

「さっきも少し言っただが、美智子の部屋からドラッグらしきモノが発見されて、美智子はその薬のせいで混乱状態に陥ったって噂が流れている」

「そう……そんな噂が流れてるんだ……」

「もちろん、オレは美智子がドラッグなんてやってないと思ってる。だけど、噂って言うものは無責任に広がって、それは本人がどんなに否定しても一部の人間には関係の無いモノに変わっていく事も事実だ」

「うん……よく解る。噂なんてそんなモノだし、誰が流したのかなんて結局のところ辿り着く事なんて出来ないし……でも私、それは

どうでも良いの」

「え？」

「うつん、やっぱりちょっと悲しいけど、でも、私の事を信じてくれる人もいるから」

「それは絶対だ。大部分の人間だったら、美智子がドラッグに手を出す奴じゃない事くらい解ってる。もちろんそれは、オレや雅美を含めてだ」

「ありがとう……でも、これではつきりしたのかも……」

美智子は、堅く閉じられた自分の拳を真剣な表情で見つめた。

ああ、敵が居る 雨宮は静かにその事実を告げた。

「雨宮君もそう思うんだ……乃亜さんは、どうですか？」

（乃亜？ああそうか、目の前の女は乃亜って言うのか）

雨宮は先ほどの違和感を思い出した。目の前にいるどこかミステリアスな雰囲気をもとう美少女に対し、妙に興味を持たなかった事を。

いや、持てなかったのか？ 雨宮は改めて乃亜という少女に

興味を持った。

声を掛けられてから疑問に思っていたのだが、完全に気配を『消して』いた少女。しかも自然体でありながらもどこか隙のない立ち居振る舞い……それに、どうして美智子の病室にいて、いつの間にか美智子の信頼を勝ち得ているのか。

美智子とは、どんな関係なのかも今になって思えば疑問である。

「敵は確実に存在しています」

ん どうしてそんなに断定的に言い切れる？

「私がこの病室に入った時、窓が開いていました」

「なに？」

「あの……それが何か？」

「これは私の予測に過ぎませんが、美智子さん、あなたの中になる事件の記憶は消されたのだと思います……いいえ、実際それは間違いはありません」

乃亜は確信に満ちた瞳で語った。

「それも、私がこの病室に入る何分か前の出来事です」

「え！？」

雨宮と美智子の驚きの声が重なった。

今日、この場で記憶が消されただど！！バカな……そんな事出来るはずが　　雨宮は予測していたモノの、自分の予測を遙に上回る展開に驚きの声をあげた。

「ですが、美智子さんが学園からこの病院に運ばれて以来、彼女に接触して記憶を消す時間はそれ以外考えられません」

「ぐっ……！」

確かに記憶を消されているのは間違いない。目の前にいる乃亜に確認する以前に、その事に予感めいたモノもあつたし、実際和田美智子との対話から、雨宮は美智子の記憶が故意に操作されていることを確信すらしていた。

では記憶を消す時間はいつだったのか　　雨宮は気がついた。

時系列的に考えて、美智子は学園で倒れてから救急車で運ばれ、この病室で意識が戻らずに眠り続けていたのだ。その間、美智子の側に近寄れたのは病院関係者が肉親か……少なくとも第三者がおいそれと接触出来る時間的な余裕など無かったはずである。

だとすれば、今、自分たちが来るまでの僅かな時間　　その時間で行うしか無い。

「しかし……例えそうだとして、一体誰がこんな短時間で人の記憶を操作出来る？」

「雨宮さんと言いましたね」

乃亜は静かに雨宮へ向かって声を掛けた。

「あなたは人の記憶を操作出来る事については、何の疑問も持たれないのですね……人の記憶を操作するなど、常識的にはあまり考えられないと思いますが」

「乃亜と言ったか？お前にだつて言える事だと思うが？」

雨宮は疑いの目を向けた。

「この事件の犯人は一体どんな奴なんだ？そしてお前は、一体何者なんだ」

「……………」

「まただんまりか？お前がオレに対して疑問を持つように、オレも少なからず疑問を持つてるんだぜ……少なくとも、一般人とは思えない」

そうだ、気配を完全に消せる技術を持ち、少なくとも四歩程度の距離ならばどんな状況であろうとも相手を無力化出来る程の自信。

そして、自分を相手の意識から意図的に興味を無くさせる能力

雨宮は先ほど、不自然な位に乃亜への興味や意識が回避されている事に思い当たった。

そうなのだ、アレは状況云々で目の前の女に興味を持たなかったんじゃない……強制的に興味を持つ事をそらされていたんだ。そんな事が出来る人間など、雨宮は今まで出会った事は無かった。

確かに、古武道などでは相手の視界に入っているにも限らず、その相手の意識からそれる様に動き間合いに入る『技術』と言うモノは聞いた事がある。しかしだ、乃亜という少女は一切の動きもなく、相手が自らを意識しなくなる技術などは聞いた事がない。

いやそれは、もはや『技術』と言うべきモノではない。それは既に『能力』と呼ばれるべきモノなのだ。少なくとも、目の前にいる少女が、普通に暮らしているだけのただの少女とは到底思えない

雨宮は絶対的な確信を持って乃亜を見つめていた。

「一体お前は何なんだ？」

重ねて質問した。

ココで自分の正体を語らなければ、オレはお前を信用出来ない
そんな思いの元に。

「わ、私は……私は……」

乃亜はここにきて、自らの正体をさらす事に躊躇いを持っているのか、雨宮の問いかけに表情を歪めていた。

「わ、私は」

先ほどまでの平常心が何処に消えたのか、冷静さを失い掛けている
と言うよりも、何かその事を口にするのが心苦しいと言った、いや苦悶にも似た表情で言葉に詰まっている。

何故そんな表情をする？オレはそれ程目の前にいる少女が答えづらい質問でも下のだろうか？

その苦悶にも似た表情に、あれ程までに高ぶっていた気持ちが急速にしばんでいくのを意識した。

ちっ オレは何をそんなに焦ってるんだ……

雨宮は乃亜のイメージとはほど遠い動揺した表情に、冷静さを取り戻してきた。

これ程短時間で人の記憶を操作出来る敵が美智子に接触してきた事と、目の前にいる正体不明な少女の為に平静でいらなかったのだが、よくよく考えてみれば、乃亜と呼ばれる少女が敵であるならば、自分程度の相手など歯牙にも掛けず倒し、それこそ事件に関する記憶を操作されているに違いない。

となれば、少なくとも乃亜は敵であるはずはないのだ。

それを追いつめる様な真似をするのは憚られた。

目の前の少女は、自らの正体を語りたくとも語れない そう、
語る事に対して『恐怖』に似た感情を持っている……雨宮にはそう

思えた。

「悪かったな、お前が自分の正体を明かしたくないのなら別に良い。どうもオレも冷静さを失っていた」

そうだ、どう考えても目の前にいる女はこの件とは無関係だ。

「お前が今、この場でその正体を語る必要はない」

「ど、どうして……」

雨宮は照れ隠しの様に頭を掻きながら「お前はさっき、美智子の味方だと言った……それで充分だろ？」

「……………信じてもらえるのですか？」

「あまり初対面の人間を簡単に信じてしまつのもどうかと思うがな。お前はどうかなんだ美智子？」

「私？私は初めから……乃亜さんは良い人だっと思ってたから」

美智子が何の疑いも持たない瞳を乃亜へ向けた。

「人間ってのは著しく本能が退化した動物だって言われてるけど、そんな中でも良い人間と悪い人間を見分ける本能ってのは、多少なりとも残ってると思うてる。美智子がこう言ってるんだ……オレも信じるしか、ないだろ」

それに、どう見てもあんたが悪人には見えないからな　疑いの目を向けた事に恥ずかしさを感じてか、最後の言葉はこの男にしては珍しく恥ずかしそうにしていた。

「私は……陰陽師と呼ばれる人間です」

「え？」

美智子は驚きの声をあげたが、雨宮は乃亜の言葉にそうかと一言静かにうなずいた。

「良いのか？俺達にそれを語って」

「構いません……私の正体自体、それ程大した事では無いので」

少女はたいしたこと無いと語るが、ならどうして、さっきはその

事を言うのを躊躇ったのか……雨宮は彼女の深い傷の様なモノを感じてしまった。

自分が陰陽師である事 その事自体を恐れている様な印象を持ったからこそ、その答えを聞く事をやめたと言うのに、乃亜と言う少女が自らそれを語ろうとしていた。

「私は榊万笙さかきばんしょうの孫、榊乃亜と申します」

乃亜は改めて雨宮に自己紹介をしていた。

「榊……万笙……」

「私の家系は古くから続く陰陽師です」

「榊 って、あの榊か!？」

「雨宮君、雨宮君は乃亜さんの事、知ってるの？」

知っているとさえ知っている 雨宮は何か思い当たったのか、驚きの表情で乃亜を見つけた。

「雨宮さんが思い当たった通り、私の祖父である万笙は、陰陽師としてその名前を残しています……私がこの件に係わるのは、学園長である赤岡氏の依頼を祖父が受け、私が祖父の名代として真相を追求するためです」

そうか……あの榊家の娘なら 雨宮は今までの乃亜が行ってきた事全てに納得がいった。

一般人から見れば何処にでもありそうな名字と聞き流していたかも知れない。しかし、陰陽道に係わる者で、陰陽師の榊、いや、榊万笙の名前を知らぬ者は居ない。

曰わく、榊の者には近づくな 雨宮の頭の中に父親の言葉が蘇ってくる。

そのあまりにも強大な能力を持ち、裏の社会を影から支えている一族 そんな伝説めいた評判が雨宮の持つ知識だった。

事実、その通りの仕事を行っている事も、そして、彼ら一族が陰陽師達から恐れられている事も知っていた。

強い力とは自分を助けてもらっている内には絶大な信頼となり得る しかし、ひとたびその力を目の前にすれば、それは脅威と

もなり得るのだ。

陰陽師 と言えは聞こえは良いかも知れない。鬼を封じ、邪を調伏し、一見悪しきモノより身を助けてくれる者として存在している。

しかし、陰陽師の仕事はそれだけではない。時の権力者より、呪術にのる暗殺を請け負い、魔を放ち、敵を討つ。

一転すればそれは暗殺者としての一面も併せ持つのだ。だからこそ、強すぎる力は時に畏怖の象徴ともなり得てしまう。歴史として教科書に載るような事は無い。無いが、時の権力者が影で利用し、そして恐れの対象となっているのは間違いの無い事。

そして榊と言えば、国内でも数本の指に入る陰陽師の家系として裏の社会では敵に回してはならない と、恐れられている。

雨宮はもう一度、榊乃亜と名乗った少女を眺めた。

こんな娘が？ 雨宮の前にいる少女は、吸い込まれそうな程の澄んだ黒い瞳と、漆黒を思わせる流麗な髪の毛が印象に残る美人で、大人びた雰囲気を持っている。しかし、それに惑わされる事無く彼女を観察すれば、それは自分と何ら変わらない年相応の少女であつた。

誰が見ても、古くから続く陰陽師の家系に育ち、陰陽道に通じているとは思えない。

でも ここで雨宮は思い返す。完全に気配を『消す』能力をもち、他人に自分を『意識させない』術。そしてそれを不思議と思わせる事もない。

きつと美智子に記憶が無い事も、『自分で見てきた』のだろう…
…雨宮は乃亜の能力を疑う事は無かつた。今までの行動が、それを納得させるだけのモノであつたからだ。

「正体を隠していた事は申し訳ありませんでした。先ほども申したとおり、私の正体などどうでも良い事でした」

一度その事を認めたからか、乃亜は今度は躊躇なく口にした。

「いや、オレも最初はお前の立ち位置云々って言ってたからな……その事ならオレの方が悪かった。それに陰陽師と言うならば、オレも多少その末席に連なる家系だ。おいそれと他人にそれを明かさない方が正しい」

「雨宮さんも……陰陽師の家系だったのですね。だから私が陰陽師であると言うのも信じていただけだ　と」

「まあ、オレなんかは陰陽師と名乗れる程修行したわけじゃないし、才能が無いから佐久間学園なんて通わされてるんだけどな。だけど、別にオレが陰陽師の家系だからってお前の事を信じた訳じゃない」

「と、言うത്？」

「だから言っただろ、お前は美智子の味方だと言った　それで充分だ」

「ですが、これから美智子さんの事件を調査するのならば、その事を先に説明しておかなければならなかったと思います」

乃亜は美智子に向かって深々とお辞儀をして謝罪をしたが、美智子は慈しみを持った瞳で微笑んだ。

「乃亜さん、私も別に気にしていません。乃亜さんは私の味方と言っただけでした。そして私は、私の意思でそれを受け入れたんですもの、乃亜さんがどんな立場でどんな方であろうとも関係ありません」

「美智子さん、雨宮さん……ありがとう」

「さてと、お互いの事はこれではつきりとした訳だな……で、これからどうするかって話だが、美智子、オレがさっきした質問の答え聞かせてくれるか？」

「それは、犯人を見つけてるって事？」

「そうだ、オレは犯人を見つけて絶対にお前の前に引きづり出して

謝らせたい　そう思ってる。けど、それをお前が望まないなら、犯人を見つける事はするだろうがそれまでだ。学園側からすれば犯人を見つけたところで、闇から闇へ……今度の件はひた隠しにすると思うけど、これからの事を考えれば絶対に犯人は見つけておかなくちやならない」

「でも……それだと雨宮君に危険はないの？」

「なんだ美智子？オレの事心配してくれるのか」

「それは当たり前でしょ、友達を危険にさらすなんて絶対に出来ないわ」

「まあ、ちよつと一筋縄じゃ行かない相手かも知れないが、そりや大丈夫だろう」

雨宮は「それに、力強い味方も出来たしな」と、乃亜の方を向いた。

「乃亜さんも……犯人を見つけるんですよ」

「はい、元々お爺さまへの依頼も、事件の真相を明らかにする事そしてそれは犯人を見つけてその能力を封じる事に繋がりますから」

「危険は、無いんですか？」

「大丈夫です。私は私の持てる全力を以て美智子さんをお守りします」

「いえ、私ではなく、乃亜さん、あなたに危険はないのか　と、聞いたんです」

「ど、どうして私の事など？」

「だって友達に、危険な事なんてさせられません」

え？　乃亜は真摯な瞳を向ける美智子に息をのんだ。

「わ、私は……私の事なんて……」

「それとも、乃亜さんは私と友達になつて下さいませんか？」

「み、美智子さんは、私の事を知らないから　」

「乃亜、さっきの言葉、聞いてなかったのか？オレや美智子はお前が何者であろうと信じるって決めたんだぜ。それじゃダメなのか？」

この時乃亜は、自分の中にある感情の表現方法が解らなかった

が、一つだけ確かな事があるとすれば、それは自らの瞳から落ちた一筋のしずくが全てを語っていた。

つづく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6050d/>

古神道

2010年10月9日22時12分発行